

# 英文学会誌

第47号

2019年3月

## 目次

### 論文

- リチャード・ハミルトン《いったい何が、今日の家庭を  
こんなにも違ったもの、こんなにも魅力的なものにして  
いるのか》再考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3  
吉村典子

\* \* \*

### 特別寄稿

- この地球を次世代に引き継ぐために・・・・・・・・・・・・ 32  
山本百合子

### 英文学科生の活動

- ESL (English Speaking Lounge)・・・・・・・・・・・・・・ 38  
1年 富手晶 3年 加藤百香  
海外長期留学報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40  
ウィニペグ大学 2年 黒須菜緒  
ハイデルバーグ大学 2年 堀真奈衣  
リーズ大学 3年 高橋あかり  
北アリゾナ大学 3年 寺田菜由  
カナダ研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47  
2年 成田真由 3年 石川舞

- イン・メモリアム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51  
ご退職に寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56

### 2018年度英文学科活動報告

- 教員研究・教育活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62  
英文学科講義題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74  
英語英米文学専攻講義題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77  
卒業論文題目・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78  
英文学会活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

- English Certification 一私の勉強法一・・・・・・・・・・・・ 81



# 2018年度 論文





リチャード・ハミルトン  
《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、  
こんなにも魅力的なものにしているのか》 再考

吉村典子

はじめに

1. 「これが明日だ」展と《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、  
こんなにも魅力的なものにしているのか》
2. 「表的」アプローチ
  - 2-1 源泉
  - 2-2 「表的」提示
3. 「画的」手法

おわりに

はじめに

イギリスの美術家リチャード・ハミルトン (Richard Hamilton, 1922–2011) が 1956 年に発表した《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、こんなにも魅力的なものにしているのか》 (*Just what is it that makes today's homes so different, so appealing?* 以下《いったい何が・・・》と表記) は、「ポップ」を象徴的にあらわす作例として、戦後の美術史に必ずや登場するものである (図版 1 の上段右から 2 つ目と図版 4)。

ハミルトンは、2011 年 89 歳の生涯を閉じた。彼の表現活動の全貌がみえてきた今、「ポップ」以外の言葉で語るべき多くの特質が、彼の作品にあることに気づかされる。ポップの時代の作例すらそうである。また、ハミルトン等が当時語っていた「ポップ・アート」は、今日我々が使用するような意味合いとも異なる。そこで本稿では、当時の様相と重ね合わせな

から《いったい何が…》の再検討を行い、ハミルトンの表現活動の全貌を探る試み的一端としたい。

ハミルトンは、作品を通して示そうとする対象に常に分析的なアプローチをしている。一見遊戯性に満ちていると見られがちな《一体何が…》の制作においても、その要素として用いたアメリカの大衆文化についての極めて客観的な考察を行っている。それによって導き出された言葉が、次の15の語である。即ち「男性、女性、人類、歴史、食物、新聞、映画、T V、電話、漫画（絵情報）、言葉（テキスト情報）、テープ録音（音声情報）、車、家電、宇宙」である。この語をもとに、アメリカを中心とした新聞・雑誌等のマスメディアから抽出した図像をコラージュにした作品が《いったい何が…》なのである。そして、この作品制作後にハミルトンは「イメージは、表的 (tabular) であるのと同様に画的 (pictorial) であるべき」<sup>1</sup>と言及している。美術史家ハル・フォスターの言葉を借りれば「表的というのは、この世界に住まう製品や人間たちを一定の綱領に基づいて集成している点を指しており、画的というのは、こうした実体たちに依然として疑似イリュージョン的な空間を提供している点を指している」<sup>2</sup>ということになるが、本稿では《いったい何が…》と照らし合わせながら、ハミルトンの言う「表的」、「画的」特質を探り、それを手掛かりにこの作品の本質を再考することにしたい。

## 1. 「これが明日だ」展と《いったい何が…》

《いったい何が…》は、1956年ロンドンで開催された展覧会「これが

---

<sup>1</sup> ハミルトン自身が編集した彼の語録集 (*Collected Words, 1953-1982*. London: Thames and Hudson Ltd., 2001) にも収録されているが、次の彼の論説に掲載した《いったい何が…》の図版のキャプションにこの言葉を添えている。Richard Hamilton, "Photography and painting," *Studio International*, March 1969, p.125.

<sup>2</sup> Hal Foster, "Richard Hamilton or the Tabular Image," *The First Pop Age* (Princeton Uni. Press., 2012), p.24.

明日だ」(This is Tomorrow)<sup>3</sup>のポスターとカタログのために制作された。

当時のイギリス、特に、戦後復興期のそれは、芸術を特権的に考えるエリート主義がまだ根強く、一方、欧米の美術界を鳥瞰すれば、抽象および抽象表現主義が高揚し、芸術の舞台がフランス（パリ）からアメリカ（ニュー・ヨーク）へ広がりつつあった頃である。そうした時期に、イギリス（ロンドン）からモダン・アートの新たな潮流を発信すべく、芸術家や批評家たちが議論を重ねるようになり、その拠点の一つとして、1946年に現代芸術研究所（The Institute of Contemporary Arts, 以下ICAと表記）が設立された<sup>4</sup>。設立後は、モダン・アートのみならず、進展するマスメディアや技術、そして、新たな社会構造のことを意識し、特に、アメリカにおいて著しく発展した経済活動と消費社会が、ヨーロッパに強い影響を与えていることを議論する者たちも現れるようになった。そのような人々の間で1952年に結成されたのが、インディペンデント・グループ（The Independent Group, 以下IGと表記）である。当時のイギリス保守層のアメリカ批判とは異なり、IGはアメリカの大衆文化を見つめ、敵視することなく深く掘り下げていった。そうした視点や意識を持ち合わせながら、戦後の芸術について討論、レクチャー、イベント等を、ICAを拠点にして重ねていったのだった。結成メンバーの一人が、ハミルトンであった。IGは、美術家やデザイナーだけでなく、建築家のスミッソン夫妻（Alison & Peter

<sup>3</sup> 展覧会のほぼ1ヶ月の会期（1956年8月9日-9月9日）の間に、19,341人が訪れ、カタログ1,445冊が売れた。国内外の新聞、雑誌、TV、ラジオ等の様々なメディアでも取り上げられ、1956年の最も話題となった展覧会の一つと位置づけられた。Anne Massey, *The Independent Group: Modernism and Mass Culture in Britain, 1945-59* (Manchester University Press, 1995), P.97.

<sup>4</sup> メンバーには、詩人・批評家のハーバート・リード（Herbert Read, 1893-1968）、ローランド・ペンローズ（Roland Penrose, 1900-1984）、音楽家で詩人そして画家でもあったE.L.T. メセンズ（E.L.T. Mesens, 1903-1971）等がいた。討論やワークショップの他、オックスフォード・ストリートのアカデミー・シネマの地下で近代美術展（*40 years of Modern Art*, 1948）等を行っていたが、1950年12月にドーヴァー・ストリート（17-18 Dover Street）に最初の拠点を設置。1968年にはアーツ・カウンシルの支援でザ・マル（The Mall）に移転し、現在に至る。

Smithson,1928–1993; 1923–2003)、批評家のレイナー・バーナム (Reyner Banham, 1922–1988)、ローレンス・アロウェイ (Lawrence Alloway, 1926–1990) 等がおり、領域を超えて意見交換や活動が進められた<sup>5</sup>。

議論の中心の一つが、上述のアメリカの大衆文化であった。IGのメンバーはこのことを1954年頃から「ポップ・アート」と呼んでいたことが、アロウェイの回想の中ではっきりと示されている。「私がポップ・アートやポップ・カルチャーという言葉で呼んだものは、大衆文化に基づく芸術作品ではなく、マスメディアの産物を指してであった。」<sup>6</sup> 今日においては、むしろ「大衆文化に基づく芸術作品」を指して用いられているが、当時というポップ・アートとは「マスメディアの産物」のことであり、モダン・アートを説いてきた近代思想では解釈することのできない新たな対象や現象に、緻密な考察を通して理論的礎を築こうとする模索の過程で、使われるようになった言葉といえよう。

このようにIGでは、領域を超えた人々による討論等が行われていたが、具体的に「建築家、画家、彫刻家によるコラボレーション」をイメージした動きは、フランスの構成主義グループと交流をもつ人々の間で既に話題にされていた<sup>7</sup>。彼らと会合を持つようになったのが雑誌『アーキテクチャル・デザイン』(*Architectural Design*)の編集を当時務めていたテオ・クロズビー (Theo Crosby, 1925-1994) である。そこにIGのアロウェイ等も加わる中で、実行することになった展覧会が「これが明日だ」であった。従って、この展覧会はIGが主体となって行われたわけではなく、IGと主義主張を異にする人々も多く関わっていたのである。

---

<sup>5</sup> メンバーには、この他に写真家のナイジェル・ヘンダーソン (Nigel Henderson, 1917–1985)、画家でデザイナーのエドゥアルド・パオロツィ (Eduardo Luigi Paolozzi, 1924–2005) 等がいた。

<sup>6</sup> Lawrence Alloway, "The Development of British Pop," *Pop Art* (New York: Oxford UP, 1966), p. 27.

<sup>7</sup> フランスのグループ (La Groupe Espace) による考えや、建築批評家リチャーズ (J.M.Richards, 1907-1992) の間で既に1950年には話題になっていた。この模様は以下の文献に詳しい。Massey, p.98. Lawrence Alloway, "Design as a Human Activity," *Architectural Design*, Sep. 1956, P.302.

「これが明日だ」展の会場となったのは、ホワイトチャペル・ギャラリー (The Whitechapel Gallery) で、ロンドンのイーストエンドに 1901 年に開館された美術館である。ピカソの《ゲルニカ》(Guernica, 1937) を、イギリスで初めて 1939 年に展示したことで知られたところであり、ローランド・ペンローズが中心となって、スペイン内戦を批判する立場からこの展覧会を企画した。戦後は、1952 年に着任した館長ブライアン・ロバートソン (Bryan Robertson, 1925-2002) が、牽引するかたちで数々の現代美術展が開催された<sup>8</sup>。ブライアンは 1952 年の着任以前から、フィッツウィリアム・ミュージアム (The Fitzwilliam Museum, Cambridge) 等での現代美術展の企画運営で着目されていた人物である。「これが明日だ」展に関わったのも、ブライアンであり、クロズビー等との接点により、この展覧会に会場を提供することとなった。

「これが明日だ」展は、当初の構想を基に、アート、デザイン、テクノロジー、建築など、多岐にわたる領域を含むものとなった。表現者が 12 のグループに分かれて、ギャラリー・スペースに 12 の区画を設けて作品を展示発表した。グループのメンバー構成と展示スペースの区画計画は、クロズビー等が中心になって行った。以下の表は、メンバーを一覧にしたものである。画家、建築家、彫刻家が共同で展示を作り上げるものであったが、各グループは理念や思想等を同じくする者同士や仲間同士というわけでもなかった。目的の一つは、建築と美術の融合であったが、グループで表現の統一性を狙う必要もなく、むしろ、方法や思想のぶつかり合いがあることを期待した。アロウェイもこの展覧会の「多様性と複雑性」<sup>9</sup>を強調しているのである。ポスト・モダンにみられるような動きのはじまり

<sup>8</sup> ブライアンは、ホワイトチャペル・ギャラリー在任期間 (1952-1968) に、イギリスの芸術家のほか、ポロック (Jackson Pollock, 1912-1956)、ロスコ (Mark Rothko, 1903-1970)、ラウシェンバーグ (Robert Rauschenberg, 1925-2008) 等の企画展を行い、アメリカの前衛芸術をイギリスで紹介することにも尽力した。

<sup>9</sup> Alloway, "Design as a Human Activity," P.302.

をここに垣間見ることでもできよう。

表 「これが明日だ」展のグループとメンバー(下線部は図版1掲載のポスター作成者)

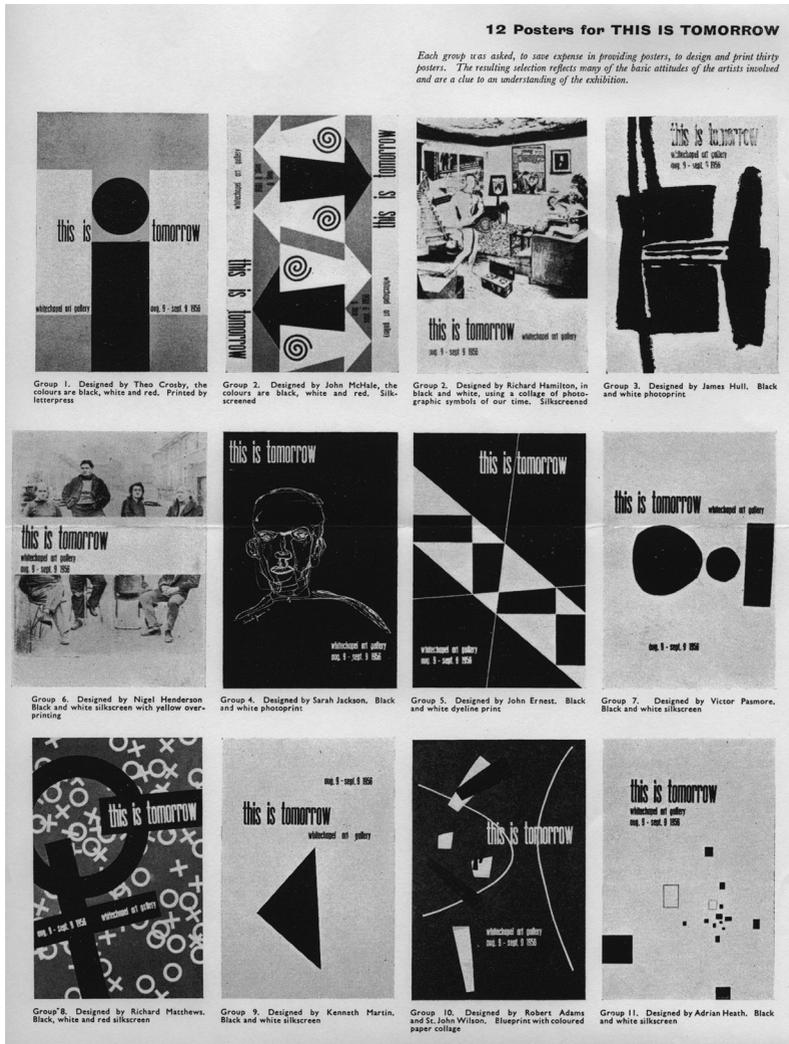
Group 1	<u>Theo Crosby</u> , Germano Facetti, William Turnbull, Edward Wright
Group 2	<u>Richard Hamilton</u> , John McHale, John Voelcker
Group 3	J. D. H.Catleugh, <u>James Hull</u> , Leslie Thornton
Group 4	Anthony Jackson, <u>Sarah Jackson</u> , Emilio Scanavino
Group 5	<u>John Ernest</u> , Anthony Hill, Denis Williams
Group 6	Eduardo Paolozzi, Alison and Peter Smithson, <u>Nigel Henderson</u>
Group 7	<u>Victor Pasmore</u> , Ernő Goldfinger, Helen Phillips
Group 8	James Stirling, Michael Pine, <u>Richard Matthews</u>
Group 9	<u>Kenneth Martin</u> , Mary Martin, John Weeks
Group 10	<u>Robert Adams</u> , Frank Newby, Peter Carter, <u>Colin St. John Wilson</u>
Group 11	<u>Adrian Heath</u> , John Weeks
Group 12	Lawrence Alloway, Geoffrey Holroyd, Toni del Renzio

ハミルトンは、美術家マクヘイル (John McHale, 1922–1978)、建築家ヴェルカー (John Voelcker, 1927–1972)<sup>10</sup> とともに「グループ2」(以下G2と表記)のメンバーとなった。ハミルトンとマクヘイルはIGのメンバーで、ヴェルカーはIGのスマリソン夫妻と接点があった。このほか、G2には、EMIの音楽監督コーデル (Frank Cordell, 1918–1980)と彼の妻でハンガリーの画家マグダ (Magda Cordell, 1921–2008)、そしてハミルトンの妻テリー (Terry Hamilton)も非公式ながら協力した。

図版1は、展覧会開催直後の雑誌『アーキテクチャル・デザイン』に掲載された各グループのポスターである。全体の様子を概観できる資料の一つとしてここに挙げておきたい。前述の展覧会企画の経緯からしても、構成主義を標榜する芸術家も多く、ポスターを見てもその色彩が強い。実際、

---

<sup>10</sup> 第9回近代建築国際会議 CIAM (1953)において結成されたTeam 10のメンバーであり、そこでスマリソン夫妻と接点をもつ。ここからスマリソン夫妻の「ブルータリズム」(brutalism)が展開することになる。



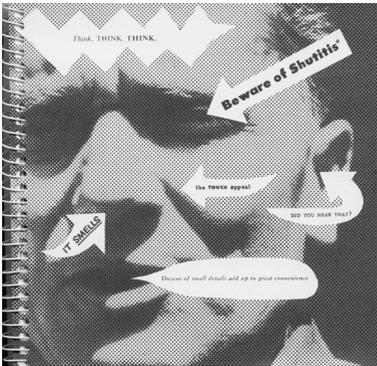
図版 1 “12 Posters for This is Tomorrow,” *Architectural Design*, September 1956.  
 上段左から右に G1, G2 (マクヘイル作)、G2 (ハミルトン作)、G3；中段 G6, G4, G5, G7；下段 G8, G9, G10, G11 のポスターが掲載されている。

12のグループのうち、7グループはIGのメンバーではなく、その中にはロシア構成主義を思わせる展示も見られる。

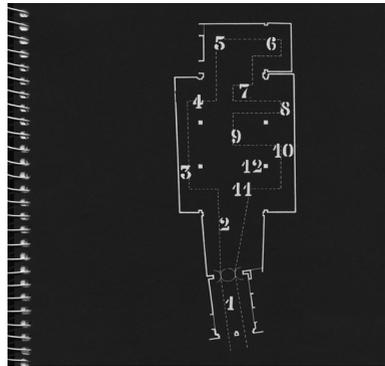
今日、「これが明日だ」展といえば、IG、さらに「ポップの幕開け」のような印象が持たれているのであるが、上記の点からすれば、IGのメンバーや「ポップ」を意識する作家はむしろ少数派である。にもかかわらず、前述のような印象があるとすれば、IGと「ポップ」の両方に関わったハミルトンの表現および言説のインパクトが、いかに強いものであったかを推し量ることができよう。

実際の展示も、抽象絵画や彫刻、それらを取り巻く空間構成が大多数を占めるなかで、ハミルトンが関わったG2の空間は異彩を放っていた。「びっくりハウス」(“fun house”)と呼ばれた展示では、当時のアメリカの大衆文化の断片、例えばハリウッド映画上のマリリン・モンローやSFコミックに登場するロボット等を二次元に巨大化したものや、三次元にあらわした巨大ビール瓶、またロボットの声や大衆音楽等の音響、そしてイチゴのような甘い香りも含まれ、「あふれんばかりのカーニヴァル作品」とアロウェイが形容したような世界がそこにあった。G2や展覧会全体に関する詳細は別稿で扱うことにするが、G2は、人間の知覚を刺激する展示を意図したものであった。

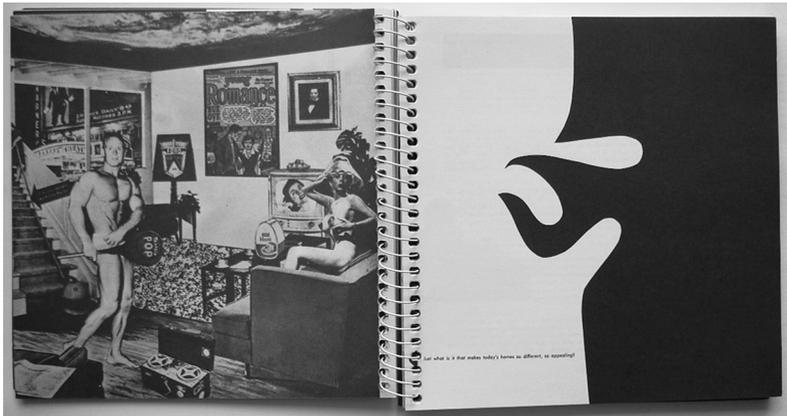
それを象徴するような図が、展覧会カタログにも掲載され(図版2)、類似する内容の巨大パネルが会場にも設置された。これはG2による頁であるが、カタログ全体のデザインは、IGのメンバーの一人で、活字デザインや出版に携わっていたエドワード・ライト(Edward Wright, 1912-1988)によるものである。一辺16.5cmの正方形で、ワイヤーで綴られたものである。展覧会のタイトルが数ページにわたって断片的に表示され、その後、アロウェイ等の序文が続く。そして12のグループの配置略図(図版3)の後に、各グループ6頁が与えられ、作品の一部やコンセプトなどが掲載されている。《いったい何が…》はポスターの他に、このG2の



図版2 「これが明日だ」展カタログ G2の頁(部分)



図版3 「これが明日だ」展カタログ グループ展示配置図



図版4 「これが明日だ」展カタログ G2の見開きページ

左頁にハミルトンの《いったい何が…》の画像、右頁下にタイトルを入れている。

ページを飾った(図版4)。アロウェイは、《いったい何が…》を指して、「これこそ大衆文化の『財産目録』<sup>11</sup>と形容している。

展覧会ポスターやカタログ上の《いったい何が…》は、モノクロ印刷

<sup>11</sup> Alloway, "The Development of British Pop," p. 27.

であるが、そのもととなった作品は、多色の印刷メディアのコラージュにより構成されているものである（26×25 cm）。「これが明日だ」展では、オリジナルは展示されておらず、ポスターやカタログのモノクロ印刷物として公表されたのであったが、やがて多くの研究書等がオリジナルをカラー図版で取り上げるようになり、多くがそれを目にするようになったのである。

当時、コラージュはIGでも関心の高い手法であった。メンバーの一人であったエドワード・パオロツィは、漫画や雑誌の切り抜きを用いたコラージュ作品を1947年には既に発表しており、1952年IGで「バンク」（Bunk）と名付けた講義では、アメリカの雑誌*Life*や*Look*等から撮った写真やイラストの寄せ集めをスクリーンに投影する等の実験を行っていた。また、ハミルトンとG2を共にしたマクヘイルは、IGの中でも最も熱心にマスメディアをとおしてアメリカ文化を分析した一人であり、それを用いたコラージュ作品でも知られていた。IGでは、アロウェイと一緒に監修した「コラージュとオブジェ」（*Collages and Object*, 1954）という展覧会を開催し、ピカソ、ブラック、シュビッターズの作品とともに、IGのコラージュ作品も展示した。

そしてマクヘイルは、G2でハミルトンと共同制作を行うことになる。マクヘイルは、1955年8月から1956年5月までイェール大学の美術院でデザインを学び、その間に収集したアメリカの雑誌やコミック等を、イギリスに持ち込んだ人物の一人でもある。その一部はハミルトンの作品にも使われている。このほか、ハミルトンは、ロンドンのアメリカ大使館の図書室にも通っていた。アメリカの最新の雑誌や書籍を閲覧できる場でもあったからである。また、ロンドン・イーストエンドの商店には、アメリカの雑誌やコミック等も1950年には並んでいたことを示す当時の写真も現存している。ハミルトン自身も様々な場で*Esquire*, *Life*, *Good House-keeping*, *Time*, *Scientific American*のような雑誌を閲覧したことを回想して

いる<sup>12</sup>。こうして集まってきた大量のマテリアルが《いったい何が・・・》のもととなったわけである。

## 2. 「表的」アプローチ

### 2-1 源泉

ハミルトンの言う「表的」「tabular」の語彙には「表で示した<sup>D23</sup>」や「平板の」というニュアンスを含む。《いったい何が・・・》では、対象を列挙し、提示することが取り組まれている。先に触れたように、ハミルトンは15の語（以下、「鍵語」とする）を列挙し、大量のマテリアルの中から、それに関わる図像をテリーとコーデルが抽出している<sup>13</sup>。本稿では、この「表的」作業を遡るかたちで、これらの図像の出典にあたってみたい。「マスメディアの産物」とされるこれらが、どのようなマスメディアの状態の中にあっただのか、ハミルトンがどのようなマスメディアを体感していたのかを把握することもできよう。

図像の出典については、先行研究<sup>14</sup>によってかなりの部分が明らかにされているが、本稿では、さらに情報を加えながら、整理することにした。ハミルトンが使用したマテリアルと出典を一覧にしたものが「資料《いったい何が・・・》の構成マテリアル」である。一つずつ見ていくことにしよう。

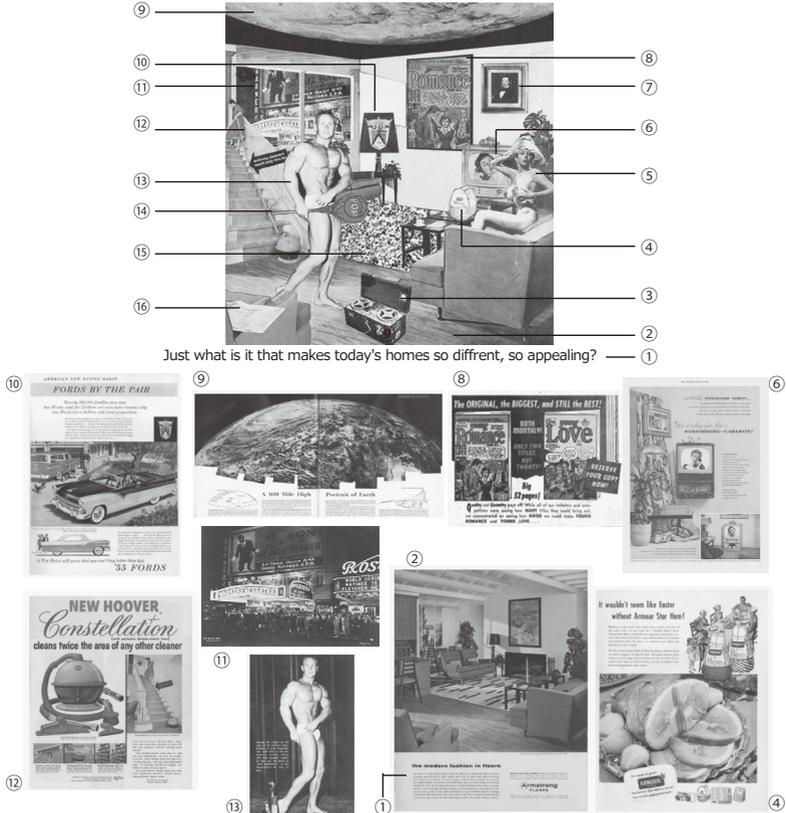
<sup>12</sup> Michael Craig-Martin, "Richard Hamilton with conversation with Michael Craig-Martin," *October Files 10 Richard Hamilton* (Cambridge MA: The MIT Press, 2010), p.3.

<sup>13</sup> 多くにマクヘイルからの資料が使われたと言われている。《いったい何が・・・》を含む「これが明日だ」展に係る締切が5月1日で、マクヘイルの帰国が5月31日だったことから、マクヘイルに会いにいったマグダ・コーデルが3月末に帰国した際に、マクヘイルの収集資料をハミルトンに届け、それを使った可能性が高い。《いったい何が・・・》は、マグダの家で制作され、マグダとテリーは、持ち帰った資料から使えそうなものを取り出す作業をしたという。John-Paul Stonard, "Pop in the Age of Boom: Richard Hamilton's 'Just what is it that makes today's homes so different, so appealing?'" *The Burlington Magazine*, CXLIX, September 2007, p. 613. しかし筆者は、ハミルトンの書簡調査（2019年2月）により、マグダが持ち帰ったものはなかったことを確認した（ハミルトンからヴェルカー宛1956年3月24日付書簡）。

<sup>14</sup> Stonard, pp.607-620.

資料

《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、こんなにも魅力的なものにしているのか?》の構成マテリアル



Just what is it that makes today's homes so different, so appealing? ①

①	Armstrong Royelle Linoleum Armstrong Floors	⑨	"A 100 Mile High Portrait of Earth" <i>Life</i> , 5 Sep 1955
②	Armstrong Royelle Linoleum Armstrong Floors	⑩	Ford logo (Fairlane) Ford Motor Company
③	Reporter The Boosey and Hawkes	⑪	<i>Jazz Singer</i> ; The Warners' Theatre, Broadway, N.Y. Warner Brothers
④	Armour Star Ham Armour & Company	⑫	Constellation Hoover
⑤	Playmate of the Month <i>Playboy</i>	⑬	Body Builder (Irvin "Zabo" Koszewski) <i>Tomorrow's Man</i> , Sep 1955.
⑥	"Panoramic Vision" TV Stromberg-Carlson	⑭	Tootsie Roll Pop Tootsie Roll Industries
⑦	Portrait of a Man (unknown)	⑮	Postcard Whitley Bay, Northumberland
⑧	<i>Young Romance</i> Crestwood Publications	⑯	<i>Journal of Commerce</i> JOC Group

上段：商品名 / 記事見出し 下段：メーカー / 掲載誌・出版社名

鍵語「言葉（テキスト情報）/ Words (textual information)」と重なるものと考えられるのが、《いったい何が・・・》のタイトルである（資料①）。この作品のタイトルすらも出典があるのである。この文言と一致するものが、アームストロング社（Armstrong Floors）の広告に見られる。即ち "Just what is it that makes today's homes so different, so appealing! Open planning, of course, and a bold use of color..." である。ハミルトンは、この後も、広告等のマスメディアに見られるテキスト情報を、自身の作品のタイトルに使うことを意識的に行っている<sup>15</sup>。このほか、鍵語の「言葉」にあたるものと思われる点（資料⑫や⑭の一部）については、後述することにした。

ここで使用された広告元のアームストロング社は、ペンシルベニアを拠点に床材等を扱う会社で、早くから雑誌等の媒体を用い広告戦略を進めていた。この広告では「アームストロング・ロイル・リノリウム」を明るい色彩の「現代」空間とともにアピールするものである。そしてこの「現代」空間が、《いったい何が・・・》の舞台としても用いられている（資料②）。この広告は、アメリカの雑誌 *The Ladies' Home Journal* の1955年6月号に掲載されていることが確認されている。1883年創刊のこの雑誌は、1903年には購読者100万人にアメリカで最初に達したものとされている。

鍵語「テープ録音（音声情報）/ Tape recording (aural information)」に関する器材が、手前の床に置かれている（資料③）。オープンリール式のテープレコーダーで、「レポーター」（“Reporter”）という商標が読み取れる。これは、ロンドンのブージー・アンド・ホークス社（the Boosey and Hawkes）の1953年の製品と一致している。テープレコーダーは、1930年代にはドイツで開発され、戦時中は情報秘匿通信目的等でさらに発達する

---

<sup>15</sup> 例えば《彼女のほうのシチュエーションは鮮烈だ》（*Hers is a lush situation*, 1958）や《紳士服・アクセサリーのこれからの傾向に関する最終発言にむけて》（*Towards a definitive statement on the coming trend in men's wear and accessories*, 1962）等がある。

ことになったが、戦後その技術はアメリカで商業的に転用され、広く流通することになる。カラージュされた「レポーター」の出典は不明であるが、印刷物であることは明らかである。広告等で扱われたものと思われる。

鍵語「食品 / Food」にあたるようなものとして、コーヒー・テーブルの上には、アーマー・スター・ハム (Armour Star Ham) の缶詰 (資料④) がある。この製造元のアーマー社 (Armour & Company) は、シカゴで1867年に設立され、20世紀中葉までには食肉加工を、シカゴの主要産業の一つに数えられるほど発展させた会社である。この広告が、アメリカの雑誌 *Look* の1954年4月20日号に掲載されたことが確認されている。缶詰産業自体は、19世紀後半には欧米で発達し、戦時中は兵士たちに配給食糧として活用され、一方でその低廉性や戦後の家事省力化、そして、特にアメリカのキャンベル社に象徴されるように、広告戦略への莫大な投資により、様々なかたちで人々の目に触れるものとなった。

鍵語「女性 / Woman」に当たると考えられる「女性」が画面右のソファーに配置されている (資料⑤)。後のハミルトンへのインタビューによると<sup>16</sup>、これは成人向け雑誌 *Playboy* の綴じ込みの「今月のプレイメイト」のピンナップ写真ということだ<sup>17</sup>。この雑誌の1953年創刊号を飾ったのがノーマ・ジーン、後のマリリン・モンローである。ハミルトンは《いったい何が…》の「女性」を「イヴ」と呼び、後述する画面左の男性を「アダム」と呼んだ<sup>18</sup>。「イヴ」の胸の無花果の葉のような図を、ハミルトンが描き加え、カラージュにより帽子かランプシェードのようなものを頭に被せている。

---

<sup>16</sup> Stonard, p.619.

<sup>17</sup> ハミルトンは、この作品の制作時点では、この女性については全く知らなかったが、この人物は、後に多くのミニマル・アート作品を発表したベアー (Joe Bear, 1929 -) という指摘がある。Stonard, p.619

<sup>18</sup> Richard Hamilton, "An Inside View (1990)," *October Files 10 Richard Hamilton* (Cambridge MA: The MIT Press, 2010), p.89.

鍵語「テレビ / TV」と重なるものが、画面右奥にある「テレビ」である(資料⑥)。これはストロムベルグ=カールストン社 (Stromberg-Carlson) の広告である。アメリカの中間層の間で最も広く流通した週刊誌の一つ *The Saturday Evening Post* の 1954 年に掲載された例がある。この会社は、電話の発明で知られるベル (Alexander Graham Bell, 1847-1922) の電話会社に勤めていた二人 (Alfred Stromberg and Androv Carlson) によって設立した会社が前身で、ニューヨーク州拠点の会社 (Home Telephone Company) に買収後は、広く家電の領域に展開されていた。

鍵語「電話 / Telephone」にあたるものが、上述の「テレビ」のモニターに映っている。女性が電話で話している図像である。このモニター部分は、一旦切り取られ、戻された形跡がある。これは、他の図像を嵌め込む意図があったかもしれないが、鍵語「テレビ」とは別の鍵語の「電話」としてのそれを示すために、改めて嵌め入れたかもしれない。

鍵語「歴史 / History」を思わせるものは、「テレビ」の上に配置された「肖像画」の図像(資料⑦)以外には見当たらない。それ以外の画面上の物品は、すべてハミルトンと同時代の産物である。この「肖像画」の出典は不明であるが、揉み上げのある短髪スタイル、白シャツに黒のボウタイ、そして左前向きもしくは右前向きの男性胸像画は 1830・40 年代の肖像画によく見られるスタイルである。コラージュには、印刷物から切り取られた肖像画の部分が使われている。

鍵語「漫画 (絵情報) / Comics (picture information)」にあたりと考えると、まさに「漫画」が、画面中央にある。アームストロング社の広告(資料②)の風景画があったところである。アメリカのコミック《ヤング・ロマンス》1949 年 26 号の表紙である(資料⑧)。このコラージュのサイズから判断すると、コミックそのものの表紙ではなく、それを宣伝する広告等と考えられ、実際サイズが一致する広告(個人蔵)も発見されている。《ヤング・ラヴ》は、その作者 (Joe Simon and Jack Kirby) にとっても最大

のヒットと言われたシリーズで、1947年にクレストウッド社（Crestwood Publications）から出された。この出版社は、1940年代から60年代にかけて、多数のコミックを世に輩出している。

鍵語「宇宙 / Space」を思わせる図像は、「天井」部分に見られる。この図像は、「100 マイルの高さから撮影された地球」（資料⑨）である。雑誌 *Life* の 1955 年 9 月 5 日号の見開きからの切り抜きである。超高層待機研究用ロケットにつけたカメラにより撮影された写真を貼り合わせて構成した地球の図像が、この雑誌に掲載されている。地球の初のカラー図版である。二段式液体燃料気象観測用ロケットは 1940 年代に開発されていたが、大戦後の米ソ冷戦とともに、宇宙開発競争の時代になる。人工衛星の実現による通信網の拡大も期待されていた。このカラー図像が公表された 1955 年は、7 月にアメリカが、8 月にソ連が人工衛星の打ち上げを宣言した年である。1969 年アメリカのアポロ 11 号の世界初の有人月面着陸をピークに、宇宙や天空についての話題がメディアを賑わしていく、その初期のものといえるであろう。

鍵語「車 / Car」にあたる車自体の図像は、《いったい何が…》の中にはないが、フォード社のエンブレムが画面ほぼ中央のランプシェードに貼られている（資料⑩）。この王冠付きのエンブレムは、1955 年に発表されたフォード社（Ford Motor Company）の「フェアレーン」（Fairlane）のシリーズに使われたもので、実際の車体上のもの以外に、広告等にエンブレムを載せたものも散見され、ハミルトンが使用したものと、サイズは多少異なるものの、同じデザインのエンブレムが、アメリカのビジネス月刊誌 *Fortune* の 1955 年 2 月号掲載広告にあることが確認されている。自動車産業は、ヨーロッパで先行していたものの、1910 年代にアメリカで大量生産が始まり、特にフォード社が高効率の大量生産システムで生産高を上げ、安価で多量に販売する。一方雇用者の士気を高めるための高給化を図るなど、大量生産資本主義の一つの経営モデルをつくった。広く「フォーディ

ズム」と呼ばれるようになる。故に、フォードといえば（エンブレムをみれば）、「車」ということと同じぐらい車の大衆化およびアメリカの大量生産資本主義を想起させるところがあったといえるであろう。一方、戦後ヨーロッパでは、自動車産業の巻き返しがみられるようになるが、《いったい何が・・・》が作れた時代のフォードは、デザインの斬新性を売りにしはじめた時期である。その一つが「ファレーン」であった。そのデザイン性を知らしめるために、雑誌などの視覚メディアを駆使していた。ハミルトンが用いたのもその一つであろう。

鍵語「映画 / Cinema」に重なると考えられるものが、画面の中の「窓」の向こうに見える（資料⑩）。画像にはニューヨークのブロードウェイにある映画館“The Warners' Theatre”と電飾、興行中の看板、そして人だかりが写っている。「ワーナーズ・シアター」は、1924年「ピカデリー・シアター」として開館した建物を、ワーナー・ブラザーズが1925年買い取り、ここで初の長編トーキー映画『ジャズ・シンガー』(*The Jazz Singer*)が1927年に公開された。写真にはその日の模様が写し出されている。《いったい何が・・・》で、ハミルトンは、電飾や“Warners”が最もよく表れている部分を使用している。この写真自体は1927年に撮影されたものだが<sup>19</sup>、ハミルトンが、《いったい何が・・・》を制作した1956年頃に公刊された新聞や雑誌から切り取ったとすれば、その頃ニューヨークでは、タイムズ・スクエアの建物を買い取り、ワイドスクリーン・シネマを「ワーナーズ・シアター」が1953年に開始したことが話題になっていた時期である。一方、嘗て使用していたブロードウェイの建物は1952年に取り壊されていることから、新天地の華々しい始まりの記事とともに、往時を振り返る写真としてこれが掲載された可能性も考えられるが、出典はまだ確認はされていない。

<sup>19</sup> 写真自体は、現在、以下のような様々なウェブサイトにはアップされている。  
<http://hollywoodhistoricphotos.com/> <https://www.alamy.com/> ほか多数。

鍵語「家電 / **Domestic Appliances**」にあたるもので、コラージュに使われているものは、画面左端に「掃除機」がある（資料⑫）。これには、新製品の掃除機「コンステレーション」(Constellation) を宣伝するフーバー社 (Hoover) の広告が用いられている。フーバー社は、1908年にアメリカ・オハイオ州で設立された掃除機メーカーで、“hoover” が「掃除機」を意味する単語となるほどの広がりとなった。この広告は、本体の新たな球体デザインとスムーズな動き、そして「2倍の距離まで届く」ホースをアピールしている。階段の上段まで掃除機をかける図像に、階下から届くのは「通常はここまで」と矢印を用いて表示する部分も用いているが、ハミルトンは、図版2のように、矢印によって強調させるテキストの図像を他の作品にもよく用いていることから、鍵語「言葉 (テキスト情報)」のイメージに合うものとしても捉えていた可能性がある。この広告は、*The Ladies' Home Journal* の1955年6月号に掲載されていたことが確認されている。

鍵語「男性 / **Man**」にあたりと考えられるボディビルダーが画面中央左に立つ（資料⑬）。前掲の「イヴ」に対して「アダム」である。ボディビルディングは、競技としての発展は20世紀初頭ヨーロッパにあり、戦後アメリカでのトレーニング技術の著しい発達とともに、コンテストも急増する。それを扱う専門誌の創刊は1950年代に集中する。その一つが、このボディビルダーを掲載した *Tomorrow's Man* である。1954年9月号にロサンゼルスで開催されたボディビルのコンテスト「ミスター・アメリカ」の3位入賞者 (Irvin 'Zabo' Koszewski, 1924–2009) を撮影した写真を掲載し、ハミルトンはそれを使用したものと思われる。

そして、ハミルトンは、このボディビルダーが、アメリカのトゥッツィー・ロール社 (1896年創業) の棒付きキャンディー「トゥッツィー・ロール・ポップ」(Tootsie Roll Pop) のようなものを握っているという格好にさせている（資料⑭）。この会社のポップ・キャンディーの発売は1931年に遡るが、1950年には *Life* 等の雑誌に広告掲載を開始し、テレビの普

及とともに、52年には子供番組のスポンサーとなり、54年にはCMも出し、マスメディア頻出のアイテムとなった。また、当時のコミック誌の広告には、こま割り漫画形式で「キャプテン・トゥッツィー」の物語を商品紹介とともに掲載している<sup>20</sup>。《いったい何が・・・》でコラージュされたものと類似した図像が、『スーパーマン』や『バッドマン』を輩出したDC Comics社の『マーティン&ルイス』(Martin & Lewis)の1954年1月の10号のトゥッツィー・ロール社の広告に見られる。ハミルトン自身も、あるコミック誌の広告から切り取ったことを回想している<sup>21</sup>。大衆的な菓子として、鍵語「食品」にあたるとも考えられるが、この商品の包装に印字されている商標“POP”の字面からは、意味が異なるとはいえ、前述のようにIGで1954年頃から使っていた“Pop Art”の“Pop”のことを思わせるところがある。当時IGが、議論の対象としていたマスメディアの産物に対して“popular art”やその短縮形“pop art”の語を用いていた。《いったい何が・・・》の制作の過程において“Pop Art”の“Pop”の文字や響きは念頭にあったことであろう。《いったい何が・・・》が後に「ポップ」を象徴していくその「言葉(テキスト情報)」としても結果的に機能したことになるともいえよう。

鍵語「人間 / Humanity」の語彙は、女、男、役者、恋人、モデルというような社会的、ジェンダー的な人間の見方ではなく、普遍的、集合的な意味合いが強い。《いったい何が・・・》上に、そうした「人間」は、画面中央の斑文様のようなカーペットに見られる(資料⑮)。ハミルトンは、この部分に嘗て入手したイングランド北東岸の保養地ウィットレイ・ベイのポストカードを用いたと述べている<sup>22</sup>。砂浜の溢れんばかりの人々が、海

<sup>20</sup> 例えば1950年前後の次のコミック誌で掲載が確認されている。*Real Screen Comics*, Superman DC National Comics publication.

<sup>21</sup> Richard Hamilton, *Painting by Numbers* (London: Thames & Hudson Ltd., 2006), P.17.

<sup>22</sup> Hamilton, “An Inside View (1990),” p.89.

岸線を鳥瞰的にとらえたこのポストカードに映りこんでいる。人々が密集した部分を切り取って用いたものと思われる。このポストカードは、のちに《ウィットレイ・ベイ》(1965年)や《ピープル・マルティプル 1/1》(1968年)等の作品に発展している。これらの作品は、ポストカード上の人々を、拡大していくことにより、人という被写体の記号が薄れ、網点上の印刷物の特質が強まり、別の視覚的効果を生み出すことを試みたものである。

鍵語「新聞 / Newspaper」については、画面手前の椅子の上には、4つ折状態の「新聞」が置かれている(資料⑩)。この図像から“*Journal of Commerce*”の文字が読み取れ、「新聞」自体は『ジャーナル・オブ・コマース』であることはわかる。この新聞は、ニューヨークで1827年に隔週刊行物として創刊され、戦後は世界ビジネスを扱う第一誌としても見做されていた。この「新聞」自体が印刷されたメディアの出典は不明である。

## 2-2 「表的」提示

「表的」アイテムの出典や内容を探ることは、ハミルトンの作品の本質を探るうえでは、殆ど意味のないことであろうし、「ポップ」の時代に扱ったこれらの対象は、大衆的なものなので、その内容に入っていくことで、益々「ポップ」の特質の中で、この作例を見ることになるであろう。しかし、出典を整理することにより再確認できたことは、すべての対象は、実際のモノではなく、印刷公刊物など、マスメディア上のそれであることである。殆どがアメリカの産物なのであるが、アメリカそのもののことではなく、世界に先駆けて、大量生産・大量消費時代にあったアメリカであり、イギリスの保守層は目を向けようとしなかったそれである。

さらに重要なのは、そのマスメディア上のモチーフは、もの本来の姿や価値というよりは、消費価値を示すものである。消費のために消費者を誘惑することが目的であり、その情動に作用する効果を有しているものである。図像の出所をみると、広告戦略の中のそれであることも見えてくるのである。ハミルトン自身も「デザインはセールスの道具になっている」

ことを論考の中で語っているし<sup>23</sup>、《いったい何が・・・》では、それを風刺的に提示している要素もあるであろう。従って、本来のモノや人物の特質を示そうとするものではないということである。

また、出典に実際にあたって見えてきたことは、想像をはるかに上回るマスメディア上の広告数である。例えば、報道写真を主体としてフォトジャーナリズムを看板にしたグラフ雑誌 *Life* にしても、今回精査した1950年代のそれは、報道より広告の数が圧倒しており、報道写真はモノクロが中心であることに対して、広告は色刷が多数を占めている。消費者の情動に作用する効果は、数においてもその勢力を増しているのである。その多くの広告は、商品がもつ、滑らかさ、弾力、光沢などのテクスチャをイラストにより効果的に示していて、それが情動を鼓舞するところもあるのであるが、ハミルトンはその効果をも「表的」にしていく展開が、《いったい何が・・・》の後の作品<sup>24</sup>に見られる。そうした作品については稿を改めることにするが、ハミルトンは、この時点でそこまで見抜いた分析を行っていることは、「これが明日だ」展の翌年1957年1月16日に、スミッソン夫妻に宛てた手紙に次のように「ポップ・アート」を定義づけていることからわかる。即ち「大衆的であること、短絡的であること、簡単に忘れられること、安いこと、大量生産であること、若者向けであること、ウィットに富んでいること、セクシーであること、まやかしであること、グラマラスであること、ビッグビジネスであること」<sup>25</sup>である。このことから、アロウェイの前掲の言葉にあるように、「ポップ・アート」とは大衆文化の産物のことであり、それを題材にした芸術作品のことは指していないことがわかる。そうしたIGでの大衆文化の追求が、《いったい何が・・・》を

<sup>23</sup> Hamilton, *Collected Words*, p.135. 1959年にダーラム大学とICAで行われた講義内容である。

<sup>24</sup> 例えば次のような作品があげられる。 *Hommage à Chrysler Corp.*, 1957. *She*, 1958-61. *Pin-up*, 1961. *AAH!*, 1962.

<sup>25</sup> Hamilton, *Collected Words*, p.28.

経て、上述の「定義」に至ったものと位置づけられる。従って、ハミルトンは、IGでの議論、「これが明日だ」展での表示、そして、それらを通して導き出された「定義」により、「ポップ・アート」の理論的礎の一つを明確にしたといえる。しかし、強調すべきは、《いったい何が…》は、「ポップ・アート」を表示することだけが目的ではないことである。

ハミルトンは、「これが明日だ」展がオープニングを迎えたあとに、BBC ラジオの特集番組に出演している。そのテープ起こしの記録を読むと、ハミルトンの次のような言葉がある。「未来はどうかを示そうとしているのではない。未来について見出す唯一の方法は、今まさに何が起きているのかをしっかりと見つめることにある。」<sup>26</sup>「これが明日だ」という展覧会のタイトルから、未来を示すような展示を期待させるところもあるが、ハミルトンにとっては「今まさに何が起きているのか」が重要であった。その「今」が、この時はハミルトンおよびIGのメンバーの言う「ポップ」だったというべきであろう。

「今まさに何が」を示す過程でなされたハミルトンのいう「表的」作業については、鍵語が列挙され、それにあたる画像が表示されている。ただし、対象本来の特質を前景化するのではなく、マスメディアが扱うそれを、そのまま提示するという手法である。つまり、ハミルトンによる脚色はないのである。「今まさに何が起きているのか」をリアルに、そして客観的に示すものである。そうであるから、アメリカ文化への称賛もなければ、そういった社会を批判的に見たうえでの教条性もないのである。さらにいえば、「表的」プロセスにおいてハミルトンは鍵語を挙げてはいるが、大量のマスメディア上の断片から、抽出したのは前述のように主にはマグダとテリーであった。「これが明日だ」展へのポスターやカタログ編集への

---

<sup>26</sup> “THIS IS TOMORROW” An exhibition at the Whitechapel Art Gallery—1956 (Peter Smithson, Colin St. J. Wilson, William Turnbull, Richard Hamilton and Anthony Hill in discussion with Theo Crosby and David Piper in BBC Radio 3 on August 17<sup>th</sup>, 1956), Tate Archive.

期限がせまる中での「協力」であった可能性もあるが、意図的なものであったとも考えられる。主観を介在させないことが、「表的」作業の客観性を増すことになるからである。

### 3. 「画的」手法

ハミルトンは、以上のように図像を「表的」にしたわけであるが、同時代の作家にみられるような並置的には表示していない。ハミルトンの場合には、「表的」なものの集まりであっても、一定の「空間」の中に構成されている。厳密に言えば、「室内」という場を思わせるイリュージョンである。これは、同時代のあるいはそれ以前のコラージュを用いる作家たちの手法と異なる点である。

《いったい何か…》については、確かに空間的表示がみられるが、この作品の画面のベースをつくっているアームストロング社の広告自体が、そもそも室内（資料②）を空間的に表しているために、ハミルトンによる意識的なイリュージョンづくりを示すものではない、という見方もあるかもしれない。しかし、この後の作品には透視図法的な提示の仕方を意識的に行っているし、「イリュージョン」に関するハミルトンの言説も散見される<sup>27</sup>。さらに、今一度《いったい何が…》を見ると、アームストロング社の広告に遠近感を意識的に加えている点が次のように確認できる。アームストロング社の室内は、画面中央から左寄りに消失点があるような透視画である。従って、視点は画面右手前にある構図である。それを強調するかのよう、「ハム缶」や「テープレコーダー」が右手前から描かれた図像を画面の右寄りに配置している。また、消失点ははずれるが、画面左奥の階段で女性が掃除機をかけている図像が左奥方向への遠近感を加味している。一方、正面やや右の壁面をみると、アームストロング社の広告にあっ

<sup>27</sup> Hamilton, *Collected Words*, p.75.

た暖炉を覆い隠すようにクリーム色の「壁紙」が、「漫画」と「肖像画」額縁の背後にはられている格好にしている。当初のアームストロング社の図にあった、窓から壁に射し込む光の白い部分にも、さらに白い紙を貼り付けることで、光の広がりや面積を加えている。これにより、窓の向こうのワーナーズ・シアターのネオンの光が差し込んでいる格好にさせ、同時にここにおいても奥行きと空間性を強調させている。以上のことから、この画面には、いくつもの透視図が存在しているといえる。アームストロング社の広告の室内の透視図を活用しつつ、その他の断片の配置や追加により、空間としてのイリュージョンを作り上げているのである。

画面におけるイリュージョンとは、西洋絵画が伝統的に探究し、表してきた世界である。ハミルトンが王立美術院の学生時代に透視画の講義を熱心に受講していたことはよく知られていることであるし<sup>28</sup>、彼の作品においても透視画的表示の仕方をよく用いている。しかし、そうした関心や好み以上に、ハミルトンは自身の作品を表す手法として、巧みにそれを用いているというべきであろう。透視画は、「伝統」であるが故に、我々が絵を見る際に、既に持っている視覚体験でもある。ハミルトンは次のようにも言う。「必要なことは、イメージの意味を明確にすることではなく、我々の知覚の潜在能力を発揮させることである。」<sup>29</sup>そして「透視図は、どんなイメージでもその理解において、主要な手がかりとなるものだ。人間の目は、ほかの手がかりによって矛盾が生じることがあっても、空間を暗示するような斜めに連なるものを読もうとする」<sup>30</sup>という見解を示している。ハミルトンのいう「画的」とは、イリュージョンの世界であり、「我々の知覚の潜在能力」と結びつけようとするものなのである。

---

<sup>28</sup> Walter John Bayes (1869–1956) の遠近法に関する 12 の講義は、ハミルトンは生涯忘れることはなかったという。Mark Godfrey, Paul Schimmel, Vicente Todoli eds., *Richard Hamilton*. (London: Tate Modern, 2014), p.307.

<sup>29</sup> Hamilton, *Collected Words*, p.31.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p.12.

こうした「伝統的」画面に、潜在的能力／視覚体験から導かれていくのである。しかし、その「伝統的」導きの先に、無意識にも想定してしまうような伝統的モチーフはない。そこにあるのは、ハミルトンが表的にした「今日の家庭」であり、「今」である。さらに、「今日の家庭」の個々のモチーフに、伝統的かつ近代絵画が求めてきたような画家による手業や無から作り上げたものはない。マスメディアの印刷物（複製）である。加えて、従来、伝統的絵画空間の中にあったモチーフ間の関係性やストーリーもないのである。一見して、ある家庭の住人の暮らしに仕立てているようであっても、モチーフとモチーフとの間の文脈はないし、空間的なこと以外は、関係性も作り上げていない。ハミルトンが「アダム」と「イヴ」と名付けた画面上の男と女すらも、二人の関係性を仄めかすものもない。画像の抽出において、ハミルトンの主観を介在させないようにした可能性について先述した点は、このことにも繋がる。

透視図により画面に誘導されるのであるが、その空間に物語を読もうとする伝統的見方はここで断ち切れ、「表的」断片のそれぞれに目がいくようになるのである。それは、大衆的なものに溢れている当時の様相を示している、というよりは、我々の視覚世界はマスメディアの断片によって構成されている「今」の様相を示すもの、つまりハミルトンにとっては「これが明日」ということにもなるのである。

### おわりに

《いったい何が・・・》のコラージュに使われたマテリアルの出典に直接あたると、当時のマスメディアの勢いは、想像以上に凄まじいものであったことに今更ながら気づかされるが、そうした現象を当時捉えようとしたのが、IGであり、ハミルトンであった。それを総称して彼らは「ポップ・アート」あるいは「ポップ・カルチャー」と呼んでおり、それを視覚的に提示したものの一つがハミルトンの《いったい何が・・・》であった。そして、

考察や制作過程の中で見えてきたことを、言葉によって定義づけたのもハミルトンであった。故に、ハミルトンは「ポップ・アート」の確立には、極めて重要な人物といえるが、前述のとおり、そのポップ・アートは、当時の勢いある、かつ、混沌たる状況を解明する中で、それ自体を総称して用いていた語であった。人間は混沌を混沌のまま理解できない。当時のこの新しい現象に対して理解の支柱となる理論もまだなかった。IGはそれを解明していくために討論を重ねたわけである。その一端を《いったい何が…》および「定義」に見ることができるが、それによると、ハミルトンにとって、その混沌は一つの思想や理論で示すべきものではないと考えていたことがわかる。「これが明日だ」展のカタログにも次のように記している。「様式を生み出すようなことに関する活動には抵抗があるし、確固とした明確な思想の表明をとおして『明日』を示そうとする考えには賛同できない。」<sup>31</sup> モダニズム批判にも通ずるものである。

またハミルトンの制作は、「ポップ」を示すことが目的であっただけではない。混沌を「画的」に示すことを狙っていたし、それにより「我々の知覚の潜在能力を発揮させる」ためのものであった。《いったい何が…》においては、ハミルトン等のいう「ポップ・アート」がそこにあり、そのためにインパクトの強いものになっているが、ハミルトン自身のそれに対する嘆美や感動を醸し出すような表現はないのである。彼が意識的に試みたことは、透視図的手法を用い、人々を画面に誘導していることである。しかし、そこには表象があるばかりなのである。それ以上もそれ以下もない、そして具象表現にありがちな画面の中のストーリーもないのである。興行を示しながらも、そこは平面の集積であることに気づかされる。ハミルトンが画家として関心があるという「イリュージョンとパラドクス」<sup>32</sup>の世界といえるかもしれない。そして、その平面の集積により、さ

---

<sup>31</sup> Richard Hamilton, "Are they cultured?" *This is Tomorrow*, 1956.

<sup>32</sup> Hamilton, *Collected Words*, p.75.

らに作品の中に引き込んでいくというよりは、画面の表面と観者の間で行き来するような、知覚の世界が構築されているように思われる。それは、G2の展示空間における、知覚を刺激する試みの一つを構成するものとなりうるものである。こうした新たな知覚世界の開発が、ハミルトンにとっての「明日」を示すもう一つの試みであったと考えられ、「ポップ」のインパクトの陰に、見過ごされていた点として挙げられるのである。



# 特別寄稿



## 特別寄稿

### この地球を次世代に引き継ぐために

イオン環境財団事務局長  
山本百合子

1984年英文学科へ入学し、英語と出会い、英語を学び、英語の大切さを知りそして英語と共に生活をする事になり、卒業後30年が経過した今、1年のうち約3分の1を海外で過ごしております。

大学時代、同じクラスだった友人と、アメリカでのホームステイへ出かけました。ホームステイでは、英語の勉強のほかにボランティア活動がありました。その内容は、アメリカやメキシコから集まった大学生と一緒に、メキシコの未開の地域に、教会を建て、水を引き、人々が集うことの出来るコミュニティを作るというものでした。海外では、教会等が地域コミュニティの中核として、位置づけられていることが多く見受けられます。従って、コミュニティのための教会建設は、地域の社会形成のスタートであり、地域住民からの期待も高く注目をされておりました。教会づくりのため出向いた場所は、メキシコで、広大な荒野に動物の骨があちこちにあり、目を背けたくなるような過酷な状況でした。水もなくシャワーも出来ず、日ごとに身体が何層もの土で覆われていき、ずっしりと重くなっていきました。近くのお店で買ったペプシは、とても熱く衝撃を受けました。工事中の教会の中で、簡易寝具で寝泊まりをし、慣れない壁塗りで疲労困憊でしたが、各国の大学生の仲間と居ることが何よりも楽しく



充実した毎日でした。ここでの経験より、次のふたつの学びがあり、私の人生に、とても大きな影響を及ぼしました。

ひとつめは、コミュニケーションのための英語の重要性であり、同志と互いの心を通わせ、心の奥底から繋がるための唯一の手段は英語であり、まさに英語は世界を繋ぐ架け橋であると学びました。

ふたつめは、社会貢献活動の大切さと、そのあるべき姿でした。ホームステイをしたのは、今から30年以上前となりますが、当時のアメリカでは既に、ボランティア活動は生活の一部として広く市民に浸透しておりました。ごく自然に、地域のさまざまな社会貢献活動に参加し、なおかつ、物の豊かさの提供ではなく、「心の豊かさ」に重きを置いた取り組みとなっておりました。

この大学時代のふたつの学びは、現在の私のイオン環境財団事務局長としての業務に直結しております。当財団は、1990年の設立以来29年間、植樹と環境教育を中心とした環境保全活動を継続しております。地球温暖化、森林減少、砂漠化、海洋汚染、異常気象をはじめとする環境問題は、時間的に猶予のない緊急課題であります。私のミッションは、これらの課題解決のため、世界各地の行政とパートナーシップを組み、環境活動を実行することにあります。イオンの植樹の最大の特徴は、店頭にてお客さま



大学時代 メキシコ ボランティア 1986年（本人右端）

に直接働きかけボランティアを募り、地域の方と一緒に実施することです。累計植樹本数は、1,170万本を超え、また伐採適齢期となった木々は中学校の校舎や商品づくりへ活用しております。植樹の目的は、防災林の再生、天災や戦争・内戦からの復興等、地域ごとに異なっております。宮城県亘理町は、東日本大震災により流失した防災海岸林再生のため2016年より3年間で、3,100名のボランティアの皆さまと45,000本の植樹を実施致しました。北海道厚真町の植樹は、減災につながった事例となります。北海道胆振東部地震で、最も震源地に近く甚大な被害があった厚真町において、2015年より3年間で1,850名のボランティアの皆さまと、17,000本の植樹を致しました。町の大半が山崩れの状況下、イオンの植樹地は、鹿ネットが倒れたのみで山崩れの被害はありませんでした。植樹を通じ、人の手が入り、適正に管理されることが減災につながるという証明となりました。

植樹と同様に、私の重要なミッションは「環境教育」です。将来、環境分野においてグローバルなステージでリーダーとなるよう、アジア各国の主要大学と連携し環境教育を実施しております。毎年1週間、9か国、約100名の大学生のフィールドワークを実施し、2018年はマレーシアのマラヤ大学にて行いました。また、国内外での太陽光発電システム寄贈を通じ、校内に電力の生産消費状態が解る表示パネルも合わせ設置し、子どもたち



インドネシア ジャカルタ マングローブ植樹 2018年9月（前面中央）

の目に触れることで再生エネルギーのことを考える機会づくりを行っています。

このひとつしかない地球を、次世代に引き継ぐため、私は、今後も多面的な環境活動に取り組んで参ります。限りある自然資本を「物」として消費し続けていくことは非常に危険であること、人が自然資本を消費し支配するのではなく、人が自然と調和を保ちながら共生する循環型社会への転換を迫られていること、そして「物」ではなく「心の豊かさ」が重要であること等を社会へ発信していきます。今、私の子供は、大学生と高校生となり手が離れてきたので、これまでの人生の歩みを振り返り「人生の忘れ物を探す旅」をスタートしました。その最初の忘れ物が、大学院での勉強でした。次は、ドクターへ進み環境学の研究を深め、環境というアプローチから「豊かな社会づくり」という課題に取り組みたいと考えております。

最後となりますが、今の私があるのは、大学時代のクラス担任であった飯塚久栄先生のご指導のお蔭であり、最大の感謝の気持ちを申し上げます。

(1988年3月宮城学院女子大学学芸学部英文学科卒業、同年4月ジャスコ株式会社(現イオン株式会社)入社、2014年イオン環境財団事務局長、2018年9月上智大学院地球環境学研究科博士前期課程修了、日本学術会議特任連携会員)



香港 太陽光発電システム寄贈式 2018年12月(前列右)



# 2018年度 英文学科生の活動



## ESL (English Speaking Lounge)

### 実践的な経験のために

1年 富手 晶

私は、実践的な経験を積みたいと思い ESL を活用しています。通い始めたきっかけは、英文学科に入学したものの授業以外に英語に触れる機会があまりなく、授業を受けて、帰るだけの大学生活は自分にとって「損」であり、あるものは徹底的に利用して自分の英語能力を養いたいという思いからでした。通い始めた当初は、緊張や上手く伝えられないのではないかという不安がありました。しかし、ESL は上手い英語を使う場ではなく、自分の考えや思いをとにかく伝える場であることに気づき、その気づきが実践的な経験への一歩でした。授業で習った表現や単語をひたすらインプットさせ、会話の中でアウトプットし、知識をものにするということを



Green 先生と ESL で話す富手さん (写真左)

繰り返しました。すると、あまり考え込まずに表現が出てくるようになり、以前より多くのことを伝えられるようになりました。

積極的に話し知識をものにしていく行動を、これからも続けていきます。

## ESL で学んだこと

3年 加藤 百香

私は2年生の頃から漠然と英語を話せる機会として ESL に通っていましたが、3年生になってから外国人留学生と交流する機会ができ、その際に自分の英会話力のなさを実感するようになりました。今年は海外研修でカナダに行くこともあり、このままの状態で行っても無駄だと思ったので今年は昨年以上に積極的に話すことを心掛け、会話を繋げることができるように意識して取り組みました。海外では会話が止まることはあり



Yoshiko 先生と ESL で話す加藤さん (写真左)

得ないそうなので、単語が出てこなくても別の表現で言い換えたり、黙ることがないように気をつけました。ESL で積極的に話すことを意識したおかげか、カナダでの海外研修では、語学学校の先生やホストファミリーと比較的会話が止まることなく話ができたとと思います。

英会話で大事なことは積極的に話すことだと思いました。自分の英会話力はまだまだで英会話として成立できるレベルではないので、これからも引き続き ESL を活用していきたいです。

## 海外長期留学報告

### 変 化

2 年 黒須 菜緒

ウィニペグ大学 (カナダ)

(2018.5.1-2019.4.30)

私は今、カナダのマニトバ州にあるウィニペグで約一年間の留学生活を送っています。私の所属している Academic のクラスの授業では、主に文法や様々なエッセイの書き方など、大学入学後に役立つ知識を学んでいます。また、授業ではディベートや、即興プレゼンをすることも多くありました。ディベートの際には、なかなか答えることができない私に対し、他国出身のクラスメイトたちは、的確に反対意見を言い合っていました。このように授業の中で、私は他国出身のクラスメイトに圧倒されることが多々ありました。彼らは、いつでも自分の意見をしっかり持っていて、自分の意見に自信を持って発言します。その様子に私も感化され、常に自分の考えを持つよう意識し、積極的に発言するようになりました。

楽しいことが多い留学生活ですが、もちろん苦に感じることも沢山ありました。私にとっては、何でも自分自身で解決しないといけないというの

が一番苦労した部分でした。私は、滞在中 VISA の期限が切れる予定だったので、留学生サービスセンターに延長方法を訪ねに行きました。ただでさえ複雑な説明が求められるのに、それを英語で説明しなければならないので、なかなか自分の意図することが伝わらず、もどかしい思いをし、しっかりと伝わっているのか不安になりました。しかし、無事に終えた今、一つ一つ乗り越えていくことが、英語力の向上にもつながり、なによりも自分自身でやり遂げたという事実が、自分に自信をつけてくれたような気がします。

この留学を通し得た英語力、精神力、経験は、確実に生涯自分にとっての糧になると思います。またここウィニペグで私は多くの人に出会うことができました。ホストファミリー、先生や、友人、また多くのカナダ人の優しさに触れることもできました。この出会いが自分を大きく変え成長させてくれたと思っています。



アイスホッケー会場にてルームメイトと（本人写真右）

## ハイデルバーグ大学での生活

2年 堀 真奈衣

ハイデルバーグ大学 (アメリカ)

(2018.8.12-2019.5.14)

私が留学をしているハイデルバーグ大学は、アメリカはオハイオ州のティフィンという小さな町にあります。都市部からは離れた田舎であるため、ほとんどの学生が寮に住んで生活をしています。私もキャンパス内の寮に住んでいて、アメリカ人のルームメイトと日々を過ごしています。実際に寮で暮らすようになるまで、ルームメイトと仲良くできるかなという不安はありました。しかし今、私は、寮での暮らしにとっても満足していま



キャンパス内のイベントで友達と (本人右)

す。ルームメイトとも気が合い、カフェテリアでの食事もとても美味しいです。ここでの日本人大学生は私一人だけですが、私はそれを英語だけの環境で過ごせる利点だと考えています。

前期に受けた授業は4つの英語の授業で、スピーキングやライティングなどのスキルに重点をおいたクラスです。発言しやすい環境であるため、わからないことがなくなるまでたくさん質問をしています。後期には現地の学生と一緒に、アメリカ文学などの授業を受ける事も決まっています。一層難しくなると思いますが、とても優しくいつも助けてくれる教授の方々や友達のを借りながら、頑張っていけると確信しています。キャンパス内では、日常的に、映画鑑賞会などたくさんのイベントが行われています。積極的に参加していると、留学生の友達以外にも、どんどんアメリカ人の友達が増えていきました。全員とは言いませんが、みんなとてもフレンドリーで優しいです。

私は、思いついたことは質問してみるということを心がけています。そうすると必ず答えてくれますし、そこから会話が広がります。実際にたくさん会話をしていると覚えが早く、言い回しなどがうまくでき、英語力が伸びていると実感しています。私はハイデルバーグ大学が大好きです。私の留学、ここでの生活に関わってくれた全ての人々に感謝し、残りの生活を悔いのないよう過ごしていきたいと思います。

## My Life in Leeds

3年 高橋あかり

リーズ大学 (イギリス)

(2018.8.6-12.14)

私は現在、イギリスのリーズ大学に留学をしています。こちらの授業は

まだ終わっていませんが、8月から現在まで経験してきたことをまとめたいと思います。

英語力の向上という目的はもちろん、日本を離れて多国籍の人とかかわりながら生活するといった経験は、将来必ず役に立つと思い留学することを決めました。実際に、これまで体験してきたことの多くは、日本にいたらできないものばかりで、本当に貴重な時間を過ごしています。リーズ大学は想像以上に大きなキャンパスで、常に多くの留学生を見かけます。私がここで出会った学生は皆、志が高く、それぞれの分野について深く勉強しようとする姿勢に刺激を受けています。

授業で取り扱う内容は環境や教育問題、英語の歴史など多岐にわたり、興味深いものばかりです。ディスカッションの時間が多く、時にはトピックが難しいこともあります。先生方が丁寧に指導して下さります。クラスが少人数ということもあり、自分の考えを述べたり質問したりしやすいというのも良いところです。それによって、以前より自信をもってプレ



私（写真左）の誕生日に、Leeds がある Yorkshire 地方のカレンダーをくれた  
ホストファミリーと

ゼンテーション等をする事ができるようになったと思います。

住まいはずっと学生寮の予定でしたが、6週間滞在した後はホームステイに変更になりました。変更は想定外でしたが、幸運にも2つの異なる暮らし方を体験することができました。特に、ホストファミリーとの生活は、私にとってかけがえのないものになっています。私は、誕生日をこちらで迎えることになりプレゼントとケーキでお祝いしてくれた時は、とても嬉しく思いました。イギリス英語や文化、生活に常に触れることができるため、とても良い環境と素敵なホストファミリーに出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

留学を終えて帰国した後は、この経験を教育現場で活かしていきたいと考えています。多くの子供たちに、英語やイギリスの魅力を知ってもらいたいです。

## 北アリゾナ州立大学での活動を通して

3年 寺田 茉由

北アリゾナ州立大学 (アメリカ)

(2018.8.20–2019.5.31)

私は2年生の時、ボランティアとしてカリフォルニア州に二週間滞在し、その時に始めて異文化理解の面白さに気付き、いつか絶対にアメリカの大学で勉強をしてみたいと思ったのが留学の一番のきっかけでした。それと同時に異文化理解をするにあたって、世界中から来た様々なバックグラウンドを持った人たちともっと話をできるようにになりたいと強く思い、私は現在、北アリゾナ州立大学にある語学学校で勉強しています。

ここでの生活も3ヶ月が過ぎました。様々な体験や活動を通して学んだ事は、ここには書ききれないほど沢山あります。まず始めに、語学学校の

生活について紹介します。私がいる語学学校は、日本人が本当に少なくてクラスでも日本人一人という状況です。中国人が多く、中国語ばかりで話すクラスメイトに最初は戸惑いましたが、今ではその環境に慣れ、自分から必死に英語を話しかけています。授業では、農学に関するプレゼンや長文エッセイなど、どれも自分のやったことのないことばかりで本当に自分ができるのかと戸惑いましたが、その経験を経て、使える語彙が増えたと同時に、発想力やチャレンジ精神も鍛えられました。

その他で一番有意義に感じているのは、休日のアクティビティです。特に日本人の学生同士で開催した Japanese Culture Event では、習字や折り紙、プレゼンを通して日本の文化を伝え、各国の視点からみる日本文化についても考えさせられました。私のルームメイトのスペイン人とは、そのイベントを機にお互いの文化についても話し合うようになり、異文化理解の大切さを身に染みて感じました。また、ハイキングクラブに入ってから、アウトドア好きの友人とキャンプに出かけたり、パーティーに参加したりして、英語を使う場を増やしています。まだはっきりとした英語力の伸び



Netherlands からの留学生の友人と Japanese Culture Event にて (右)

を感じていませんが、これから更にもっと、失敗を恐れずに自分の意見を様々な場面で伝えられるようになっていきたいです。

## カナダ研修報告

### カナダ研修

2年 成田 真由

私は夏休み中に約3週間、カナダ研修に参加しました。参加を決意した理由は、英語を母語として使っている人々と自分が学んできた英語で話してみたい、日本とは違う文化を学びたいと思ったからです。

私達が通った語学学校では、初日にクラス分けテストを受け、翌日から少人数のクラスに分かれて授業を受けました。授業はもちろん全て英語で行われ、さまざまな国の生徒とともに学びました。私が授業を受けて感じたことは、生徒主体の授業づくりがなされていて、インプットよりもアウト



カナダとアメリカの国境付近（本人：一番左）

トブットの活動が多いということでした。生徒はミスをするのを気にせず、積極的に授業に参加していました。しかし、私達日本人は周りの生徒たちと比べて消極的で、間違えることが恥ずかしいという気持ちが先立っていると感じました。私もミスすることに抵抗がありました。しかし、語学学校の先生が「間違いを恐れずに挑戦しよう。どんどん挑戦していけば話せるようになる。日本人は Grammar の力があるのだから、自信をもって」とおっしゃっていました。それを聞いて私は気持ちを切り替え、どの授業にも意欲的に取り組み、発言する回数を増やしていきました。

研修中は、午前中が学校で午後はアクティビティだったため、英語を学ぶだけではなくカナダの魅力や文化をも感じることができました。また、ホームステイ先でも英語を学び、英語を使いました。私のホストファミリーはインド出身の方々でしたが、彼らは日常会話が英語であるため、私は多くの時間を英語と触れ合うことができたとともに、インドの文化についても学ぶことができました。

3 週間はあっという間に過ぎ去ってしまいましたが、私にとっては非常に有意義な 3 週間でした。これは、日本では決して経験できなかったことです。私は今回のカナダ研修で学んだことを活かし、これからも勉学に励みミスを恐れず挑戦していきたいと思えます。

Thanks, Canada. See you Again.

3 年 石川 舞

私にとってカナダ研修に参加することは 6 年前からの夢であり、この経験が人生の中で大きな財産になったとともに、渡航前以上にカナダが大好きになりました。

研修は 24 日間で、ビクトリアで 3 週間の語学研修とバンクーバーで 2

日間の観光を楽しみました。長いフライトを終え、ビクトリア空港に到着すると、ホストファミリーと語学学校の先生方が笑顔でお迎えしてくださいました。研修では、ひとつの家庭に2人ずつホームステイしました。私達のホストファミリーから出迎えに来てくれたのはマザー1人でした。車で楽しく会話しながら自宅へ向かいました。2日目は、自宅でホストマザーの誕生日パーティが開かれ、ホストマザーの友人約20人を招待して一緒にお祝いしました。沢山の人が話しかけてくださり、英語のシャワーを浴びて、英語で物事を考えることが出来ました。そこで出会った一人から「こっちは、自分の考えをしっかりと言わないとその場にはいないものとされる。だから、間違いを恐れずにどんどんお話してね」という言葉ももらい緊張がほぐれ、「思ったことはしっかり言葉にしていく、積極的に発言する」をモットーに3週間過ごすことが出来ました。

語学学校では、午前中に Grammar, Listening, Reading の授業を受け、午後はアクティビティで、ホエールウォッチングやロッククライミング、カヌーなど日本にいるとなかなか出来ないような体験をしました。アクティ

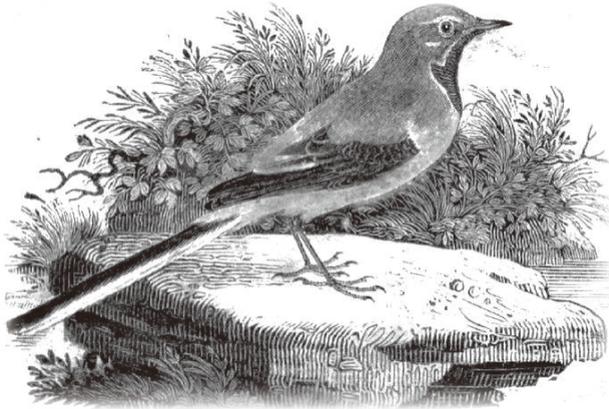


ビーチで出会った5歳のCoenと話をしている石川さん（本人左）

パーティがない日には、友人と寄り道をしたり、バスに乗って隣町のシドニーへも行きました。また、パーティや語学学校で出会った友人ともご飯を食べに行きました。そんな彼女達とは今でも交流が続いていて、カナダでの出会いに感謝しています。

研修を終えて得たものは、「英語を話すことへの躊躇いがなくなったこと」と「間違えることは恥ずかしくなくなったこと」です。この経験を生かして英語学習を継続し、グローバル化に適応出来る人間となるよう努力したいと思います。

イン・メモリアム  
&  
ご退職に寄せて



Thomas Bewick, Grey Wagtail (セキレイ), 木版, 5.5 cm×8.5 cm (1791-97?),  
Thomas Bewick's 'History of British Birds,' Collection Online, British Museum.

## イン・メモリアム

### 両角先生との44年間

橋間永美子

2009年3月発行の学会誌37号は両角先生退職記念号でした。表紙デザイン担当になった先生からカポータィの短編小説「ミリアム」のイメージを私所有の球体関節人形で表現したいと相談されました。一緒に日暮里の繊維街で、主人公ミリアムが着たプラム色のコートや青いドレスの生地を捜し歩いた楽しい記憶が蘇ります。撮影した画像背景には先生が要約した「ミリアム」ストーリーの英文を模様状に貼りつけ、共通友人の漫画家がプロ仕様のフォトショップ加工で仕上げました。素敵な合作になったと歓喜したことを思い出します。

先生との出会いは1973年4月の入学時。4年生の卒論合宿で鳴子温泉旅館に数日滞在した時に、サブカルチャーに関心が高いと知り、学問を離れて親しくお話しできて距離が近づいた気がします。卒業後はご自宅開催の読書会、美術館、映画、旅行などに誘って下さり、東京に移転後も変わらず44年間継続してお付き合いしていただきました。

さぞや強い絆で結ばれていたと想像されるでしょうか。両角先生は利害関係、指示、管理、支配というものが苦手な方でした。絆が強まりすぎるとそのストレスが大きくなる恐れがあります。寧ろ緩やかな絆だったからこそ、こんなにも長くご一緒させていただけたのではと感じています。いつもそばにいらなくても、信頼し、安心でき、意見を聞きたくなり、応援してくれていると実感できるのです。先生はまさに自分にとってそういう支えになる存在でした。先生もまた緩やかな絆を感じて下さったから、ご病気で東京への転院の際、付き添いを依頼なされたのでは、と勝手な思い込みをしています。

過剰な心配をしない、苦悩に共感し、ただ寄り添うだけ。一緒にいて何時間無言でも気にしないで済む、そんな風に共に過ごした最後の2カ月間でした。2017年10月に東京の病院に転院、11月末に静かに旅立たれたのでした。最後にお会いした時に「よい人生だった」という言葉を聞くことができたことは悲しみの中にも一筋の光明を見出した思いです。

学会誌特集号から丁度10年後に同誌に追悼文を寄稿する事になるとは、偶合の様な不思議な感覚にとらわれています。遠く離れていても声が聞きたくなり、会いたくなり、孤立や不安を和らげ、勇気づけてくださった両角先生。心から感謝申し上げます。

## 両角先生の思い出

今野 眞樹

私は、1982年に英文科を卒業いたしました。両角先生には、卒業論文でホーソンの「緋文字」のご指導をいただきました。ゼミの5人全員が、先生から戻される赤いペンの「？」や英文の修正でいっぱい原稿を前に、「果たして卒業できるのだろうか？」と泣いてしまうほど不安だったことを思い出します。後年、先生に当時のお話しをすると、「そうだったの？」と笑いながら驚かれていましたが。

卒業後、私は英語とは無縁の一般企業に就職いたしました。

先生にははがきで近況報告をしておりましたが、ある時、先生と個人的にお食事をする機会がありました。会社が合併し、組織と人間関係の変化に悩んでいた私は、「どうしてその人はそういうことを言ったのかしら？」という先生のなぜなぜ分析に答えているうちに、悩みの当事者ではなく傍観者として気づくことがあり、とても気が軽くなったことを覚えています。先生は、「人間観察の達人」であり、深い洞察力をお持ちの方でした。

先生とは、よく青葉山近辺に散歩に行きました。途中の花々や草木にたちどまり、愛おしそうに見ながら名前を教えてくださいました。美術館では、《年老いた不死鳥》（パウル・クレール作）に大笑い、なかなかその場を離れることができませんでした。バレエ、オペラ、京劇、浄瑠璃、狂言も鑑賞しました。美しいもの、楽しいものを体に取り込んで、「今を楽しむ生きる」ことを学びました。

今から4年ほど前に先生に誘われて「読書会」に参加しました。

卒業後まったく英語に触れていなかった私にとって、英文学を学びなおすことは、置いてきてしまった宝物を拾いに行くような気持ちでした。少しずつ積もっていく「新しい知識」が嬉しくて、いつも次回の読書会が楽しみでした。

昨年10月に先生からご自宅の「本の整理」を依頼されました。すでに体調は悪化し、深刻な状況であったにもかかわらず、私に話すときはいつもどおりの会話を楽しんだ後で、「あまり深刻にならないで」と。文学、美術、音楽、映画など、先生の本の種類は多岐にわたり、数も膨大でした。これらの本は、両角先生の知識の深さ、そして尽きることのない興味の広さを示していました。

先生は、最後まで美学を貫かれました。先生と出会えたことに心から感謝しております。また、違う世界でお会いするその時には、「先生、私も楽しく人生を過ごせました。」と報告したいと思います。 哀悼。

## 両角先生を偲んで

高橋 晶子

私は大学三、四年の時に両角先生の授業を受けました。先生は私達学生のどんな意見にも、時には大笑いしながら耳を傾けて下さいました。毎週

のレポート提出や発表など少々ハードな内容ではありましたが、授業をとっても楽しみにしていたことを覚えています。その後、私は大学院へ進学し、先生には大変丁寧に修士論文の指導をしていただきました。先生に赤ペンで添削していただいた原稿は、数多くのクエスチョンマーク、そして厳しいコメントで真っ赤ですが、今でも私の大切な宝物です。

大学院を修了した私に、両角先生は「これからは友達として仲良くしていきましょう」と仰いました。先生のことを友達だなんて…と最初は戸惑いでしたが、おいしいと評判のタルトを食べに行ったり、お酒を飲みながら好きな作家や俳優について熱く語り合ったりと楽しい時間を一緒に過ごさせていただくうちに、先生のことを友達のように思う瞬間が増えてきました。

そんな友達のようにカフェでお喋りをしていたある日、先生から一通の封筒を渡されました。何だろうと開けてみると、出てきたのは私が大学三年の時に授業で提出したレポートで、ホーソンの短編について書いたものと、『ハックルベリー・フィンの冒険』について書いたものでした。約十五年ぶりに読み返す自分のレポートは、稚拙な表現だらけの感想文でしかありませんでした。しかし先生は私のレポートを「パワーに溢れている」と仰って、今こそ読むべきと返して下さいました。

私は大学院を修了後、他大学で文学の勉強を続けていましたが、ちょうどこの時、論文執筆がなかなか進まず悩んでいました。そんな私に先生は、このレポートを書いた頃のような気持ちを持って論文に取り組みれば大丈夫と励ましてくださいました。確かに十五年前のレポートからは、論証の組み立て方には大いに疑問がありますが、作品について語りたいたいという私の熱と勢いだけは感じる気がしました。それは論文を書くにあたり、いろいろ考え過ぎて先に進めない私への、もっと作品と向き合い、その時に沸き起こる自分の感情を大事にすべきという教えでもありました。

友達のように接しながらも、私が迷い、悩んでいる状況を理解し、より良い解決の道へと導き、励まして下さいました両角先生は、いつでも私の師

なのだと改めて強く感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そしてその後、無事論文を書き終えることができました。

師であり、私の友達にもなって下さった両角先生。本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。



最終講義（2016年2月）

在職期間：1973年4月～2009年3月

非常勤講師：2009年4月～2016年3月

## ご退職に寄せて

### Hitomi Abe Wishing you a Happy Retirement

John Wiltshier  
Head of the English Department

On behalf of the department I would like to take this opportunity to express the huge debt of gratitude that we owe to Hitomi Abe who will retire at the end of this academic year. 'Abe-san' has been the pillar of the English department office for 36 years.

After joining the department in 1983 she has worked tirelessly to make sure the department runs smoothly. On so many occasions her work ethic and attention to detail have avoided deadlines being missed and errors being made. Her dedication to duty is second to none.

Over her 36 years Abe-san has seen many changes to department staff and to the overall size of the department. She has somehow been able to tolerate the peculiarities of a varied and colourful mix of non-Japanese and Japanese teachers alike!

In addition to her office work, she has accompanied staff to the UK on their summer visits and I have always enjoyed chatting to Abe-san at our department social events.

A huge hole will be left in the English department after her retirement, a hole that we can never hope to fill. Abe-san is simply irreplaceable.

## 阿部ひとみさんへ

遊佐 典昭

副手の阿部ひとみさんが、2019年3月末日を持って定年退職をなされます。

長年本当にご苦労様でした。阿部さんは英文学科の要でしたので、4月以降に学科が上手く機能するのかどうか、学科教員全員が不安に思っています。多様な学生が入学する現在において、学生のみならず教員の実務サポートを行う副手の役割は従来に増して大きいものがあります。この意味でも阿部さんの退職は、英文学科にとっては大きな損失です。学科の総意として、何度か阿部さんに再雇用制度の応募を打診しましたが、阿部さんの決断を尊重することになりました。

私が英文学科に赴任した時に、阿部さんの他に、鈴木紀子さん、西條アヤ子さんが副手として勤務なされていました。三人の役割分担はそれぞれ異なっており、性格の異なる三人が素晴らしいチームワークをとり、教員との連携を可能にしていたのは阿部さんの存在だったと思います。お二人が退職された後は、阿部さんが孤軍奮闘で英文学科の中心的仕事を担ってきました。例えば、阿部さんの得意とする新学期の時間割作成は、神業と言っても過言ではありません。阿部さんの「時間割を組むのが難しければ難しい程燃える」という台詞は、阿部さんの能力の高さを端的に表していると思います。また、阿部さんには私の原稿の初稿校正を何度お願いしたか分かりません。いつもの確かなコメントと、参考文献の綿密なチェックは本当にありがたかったです。私にとっては、信頼のおける編集担当者という存在でした。

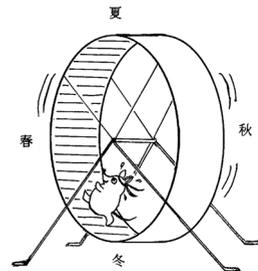
阿部さんと私は同い年ということもあり、「ほどよい距離感で、たわいのない話をする」のが、私にとっては珠玉の時間でした。このおかげで、

英文学科で教育や研究に今まで打ち込めたと思います。感謝しかありません。阿部さんは恐らく、年代を超えた人に対しても「ほどよい距離感で、たわいのない話をする」能力をお持ちだと推察いたします。退職後にはバードウォッチングを楽しみにしているとうかがっていますが、鳥だけではなく「ほどよい距離感で、たわいのない話をする」ことで多くの人に安らぎを与え続けて下さい。

## 英文学科と共に歩んだ年月

阿部ひとみ

副手室の1年は4月の入学式に始まり3月の卒業式で終わりではなく、10月頃から後期の仕事をしながら次年度の準備を進め、3月から4月にかけて引き続き次のサイクルがグルグル回り始めます。英文学科の副手になって30年以上、そのサイクルを回し車に乗ったハツカネズミのように必死に走り続けて来ました。当初は英文学科の専任副手は3人で、先輩2人のお蔭で気楽な立場でしたが、2人とも退職して専任1人になり、臨時の方と組むようになってからは、自分1人で全てを背負っているような気になり、仕事に穴は空けられないといつも緊張して過ごして来ました。最近では体力が衰え、このまま走り続けるのはもう無理と、この春の定年を機に、漸くこの回し車から降りられると安堵しております。



回し車 (本人画)

英文学科で学んで、英文学科に勤めることができ、英語に関わる仕事が出来たことは大変幸運なことでした。外国人の先生方と接する機会も多く、日本語の代筆をしたり、時には私用でお手伝いすることもありました。

私の仕事は、どちらかと言えば先生方に接する機会の方が多く、全体として学生に接することはあっても、学生一人一人を知る機会はなかなかありません。特に副手室が人文館から講義館に移ってからは、学生さんとの距離が広がってしまいました。ですので、海外研修の付添で学生と24時間一緒に過ごしたことは、とてもいい経験でした。また、日本英文学会、東北英文学会の会場校となった時や、海外の劇団を招いてシェークスピア等の英語劇を上演した時には、学生ボランティアはよく活躍してくれました。英文学会主催の英語合宿に参加したこともあります。一人一人と接してみると、皆それぞれ個性豊かでとても魅力的な学生さんばかりでした。

母校に勤めると、それまでは先生と学生という関係だったのが、上司と部下あるいは同僚という立場になります。しかし、こちらはなかなか学生気分が抜けず、相変わらず先生として接していたように思います。やがて、教えていただいた先生方がすべて退職されて、特に震災を経て意識は変わりました。東日本大震災の時には先生方といっしょに英文学科生の安否確認をしましたが、最後の一人と連絡が取れ全員無事が確認されたと聞いた時にはホッとして、自分も先生方と同じチームの一員なのだと思います。

他大学では、改組によって名称が変わったり、英文学科そのものがなくなったりする例も多くある中で、定年まで英文学科に勤めることが出来たことはとても幸せなことでした。英文学科が設置から今日まで長い年月を経て来られたのは、カリキュラムを改定して新しいコースを増設したり、新たな企画を始めたりして、先生方がいろいろとアイディアを出して、時代に合わせた改革をしてきた努力の成果であることは、ずっと身近で見えてきて存じております。途中退職することなく定年まで自分がなんとかやってこられたのも、先生方、先輩方、同僚の方々、事務の方々、学生さんたちに恵まれたお蔭とっております。英文学科が、この先も末長く続いていくことを願ってやみません。

(在職期間：1983年4月～2019年3月)

# 2018 年度英文學科活動報告



## 2018 年度教員研究・教育活動報告

遊佐典昭

### 研究活動

研究課題「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」(科研基盤 (B)) が 2 年目を迎えた。今年度は、1 回ミーティングを行い、研究協力者である Roumyana Slabakova 教授 (University of Southampton) から外部評価を受けた。また、Slabakova 教授が来日中に「言語学が第二言語教育で貢献が可能か」と題する公開講演会を開催し、国内外から多くの参加者をえた。研究成果の一部は、言語理論に基づいたバイリンガル研究の有力国際誌にコメンタリー論文として掲載された。また、研究成果をまとめた論文が掲載されている本を編集した。さらに、「日本人英語学習者が不得手な目的格関係代名詞と関連構文の指導法開発」(挑戦的萌芽研究) では、研究成果に基づいた論文を掲載した本が来年度出版予定である。なお、この研究成果は 1 月の海外の学会でも発表を行った。

### 論文

1. Yusa, N. (2018). "Input effects on the development of L1-language in L2 acquisition." *Linguistic Approaches to Bilingualism*. 8(6), 792–796.  
DOI: <https://doi.org/10.1075/lab.18081.yus>
2. Kiyama, S., Koizumi, M., and Yusa, N. (2018) "Sensitivity to pragmatic markers predicts the degree of autism and depression in older adults: Evidence from sentence-final expressions in Japanese." *Proceedings of the 20th Conference of the Pragmatics Society of Japan*, 273–276.
3. 遊佐典昭・杉崎鉦司・小野創 (2018)「最新の言語獲得研究と文処理研究の進展」 遊佐典昭 (編)『言語の獲得・進化・変化—心理言語学、進化言語学、歴史言語学—』開拓社 2–93.

### 編著

遊佐典昭 (編)『言語の獲得・進化・変化—心理言語学、進化言語学、歴史言語学—』開拓社

## 学会発表

1. Yoshimura, N., Nakayama, M., Fujimori, A., and Yusa, N. (2019) "Is a gender distinction helpful for Japanese EFL learners in comprehending raising constructions?" *The 15<sup>th</sup> Generative Approached to Second Language Acquisition (GASLA)*, The University of Nevada. 2019 March 22<sup>nd</sup>.
2. Yusa, N. (2019) "Intervention effects in object relative clauses: Implications for teaching object relative clauses." *The 17<sup>th</sup> Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities*, Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, 2019 January 12<sup>th</sup>.
3. Yusa, M., Xie, Z., Yusa, N., and Nakayama, M. (2018) "Acquisition of Japanese null arguments by second language learners." *8th Generative Approaches to Language Acquisition-North America (GALANA 8)*, Indiana University at Bloomington, 2018 September 29<sup>th</sup>.
4. Yusa, M., Xie, Z., Yusa, N., and Nakayama, M. (2018) "Do Chinese and English learners of Japanese accept sloppy interpretations with Japanese null arguments?" *Fourth Chuo-UHM-UTokyo Student Conference on Linguistics, Psycholinguistics, and Second Language Acquisition*, University of Hawaii at Manoa, 2018 September 14<sup>th</sup>.

## 社会活動

1. 日本英語学会理事、評議委員
2. 日本第二習得学会顧問
3. 言語科学学会企画委員

## 科学研究費の受領

1. 「文法性の錯覚から見た第二言語処理の解明と、その英語教育への応用」(基盤研究 B、代表)
2. 「日本人英語学習者が不得手な目的格関係代名詞と関連構文の指導法開発」(挑戦的萌芽研究、代表)
3. 「OS 言語の談話処理メカニズムに関するフィールド心理言語学的研究」(基盤研究 A、分担)
4. 「音韻的回帰併合の実在性と極小論における音韻部門の位置づけに関する統合的研究」(基盤 B、分担)
5. 「東アジア言語の文末共感プロソディに関わる神経可塑性：老年実験言語学研究拠点の形成」(挑戦的萌芽研究、分担)

## 他大学出講

神戸大学文学部・文学研究科（集中講義）

## 教育活動

今年度は、例年通り英文学科の『ことばと人間』『英語音声学』『Academic Reading』『英語学基礎セミナー』『心理言語学』『卒業論文セミナー』、および他学科の『基礎演習』を担当した。『Academic Reading』は今年開講された科目で、前期は英文を論理的に読む訓練を行い、後期は意味論の専門書の精読を行った。全ての科目で、教員からの一方通行ではなく、学生の質問を誘導するようなクラス運営を心がけた。その際に、高校までは、質問の方法を学んでいないと思われるので、質問をする基本的な技術から話をした。前期の英文学科の講義評価では、どの科目も、challenging だが rewarding であるという評価を得た。

増富和浩

## 研究活動

ここ数年、英語の統語分析に関しての研究を続け、一定の成果を得ることができたので、今年度は、そこで得られた知見を中学校および高等学校の英語教育の指導にどのように活かすことができるかについて検討を行った。学習指導要領の改訂時期が迫る教育現場では、文部科学省が設定する「コミュニケーションを図る資質・能力の育成」という学習目標により、文法事項の指導がさらに制限されつつある。そのような状況を踏まえ、英語学の知見を活かした効率的な英文法の指導案について具体例を示しながら論じた。その成果の一部は『人文社会科学論叢』第28号（宮城学院女子大学人文社会科学研究所）において発表することとなった。

## 論文

増富和浩「英語の未来表現の指導方法に関する一考察—will と be going to の指導方法を中心に」『人文社会科学論叢』第28号、宮城学院女子大学人文社会科学研究所、2019年3月。

## 社会活動

今年度は、オープンキャンパス等で、高校生に対して大学での学習内容

とその面白さについて紹介するなどしたほか、2018年11月10日(土)に行われた宮城学院女子大学人文社会科学研究所シンポジウム(日立システムズホール仙台):『外国語のしくみ・外国語学習のしくみ』において「言語のしくみと語学学習」というテーマで講師を務めた。当日は英語教育に関心の高い60名ほどの参加者があり、今後の英語教育について有意義な意見交換をすることができた。

## 教育活動

昨年度に引き続き英文学科生に要求される英語運用能力を保証するために、その基礎となる英文法力を養成することを狙いとしたカリキュラム(GT(grammar test)プログラム)の運営を行った。本プログラムは、英文学科1年生を対象としたものであるが、本年度は2年次科目であるGrammar 3・4への継続性を意識し、指導内容・方法に関するガイドラインを見直し、学習効果をさらに高める指導内容とした。「英語学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」(3年次必修科目)や「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」では、英語学で取り扱われる言語現象の中から、各学生が自ら設定したテーマで卒業論文や学年末の研究レポート(英文)を作成できるように、具体的・個別的な指導を行った。また、今年度からの新カリキュラム「Academic Writing & Presentation 1・2」と連携することにより、基礎セミナーの英文レポートの英語の質を高める指導を行った。

John Wiltshier

## 研究活動

In 2018, I published a four level textbook series called English Firsthand together with an online learning component called MyMobileWorld. These included the *Read-Listen-Write-Speak* approach to classroom teaching which is linked to The Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and the Global Scale of English (GSE). In addition, a paper on running speaking classes in Japanese universities has just been published. I visited Korea in October to do teacher workshops based on optimizing their communication classes and I presented in Japan on class presentations and the use of gamification in teaching.

## 研究発表

Wiltshier, J. M. (2018, July). “How should I use a course book referenced to CAN-DO statements?” Pearson Seminar for English Teachers, Tokyo.

Wiltshier, J. M., & Helgesen, M. (2018, November). “Learning spaces and appropriate gamification”. JALT International Conference, Shizuoka.

Wiltshier, J. M. (2018, November). “Six ways to improve presentations”. JALT International Conference, Shizuoka.

## 論文

Helgesen, M., Wiltshier, J. M., & Brown, S. (2018) *English Firsthand*. Pearson, Singapore.

Wiltshier, J. M., & Helgesen, M. (2019). “Tearing down the wall of silence: constructing the English conversation class at a Japanese university”. In P. Wadden & C. Hale (Eds.), *Teaching English at Japanese Universities: A New Handbook* (pp. 43–53). New York. Routledge.

## 教育活動

This year from April my newly published textbook was used by students in their speaking classes and the online component was used in their listening classes.

We refined and more closely integrated the educational visit to British Hills, Fukushima into the British Life and Culture course. We are increasingly satisfied with this fieldwork as students get a hands-on experience of British life and an orientation to studying abroad while at the same time develop new friendships with fellow students.

The TOEIC test was administered in April this year (moved from December) to provide a clear level check at the start of each year. Scores will be compared to track progress over the four years of university life.

## 社会活動

This year in my TESOL (児童英語) course my students and I taught in Sakuragaoka Elementary School and in 森の家 the kindergarten attached to Miyagi Gakuin.

Cory Koby

## 研究活動

The main focus of this year has been the improvement of MG's Reading Activity program, with special focus on improving the weekly reading patterns of both first and second year students. Using data collected in the past two years, I was able to make adjustments to the program's structure which encouraged students to establish positive reading patterns and improve their weekly reading volume throughout the entire year.

Data from several sources, including TOEIC scores in April of first, second, and third years, reading rate and comprehension scores over two entire years, and weekly reading volume throughout the program are being collected and analyzed, and I expect that, by the start of the 2020 academic year we will be able to clearly demonstrate the effectiveness of the Reading Activity program.

## 研究発表

- 2018/12 "Extensive Reading: Focus on Speed and Fluency." Tohoku ELT Expo 2018. Sendai, Japan.
- 2018/11 "Building a Community of Readers: Motivation, Guidance, and Success in Extensive Reading." 5th WorldCALL Global Summit on Computer Assisted Language Learning. Concepcion, Chile.
- 2018/11 "Using ER Materials to Improve Speed and Fluency." JALT2018 44th International Conference. Shizuoka, Japan.
- 2018/11 "One Slice of the ER Pie: Reading Speed." JALT2018 44th International Conference. Shizuoka, Japan.
- 2018/11 "Stepping Up! Breaking Into University Employment." JALT2018 44th International Conference. Shizuoka, Japan.
- 2018/10 "The What, Why, and How of Extensive Reading." EFL Talks: Reading! Reading! Reading! Webinar for TESOL Northern Greece.
- 2018/10 "One Slice of the ER Pie: Reading Speed." 10th Annual JALT ER SIG Seminar. Hiroshima, Japan.
- 2018/6 "Carrot and Stick: Motivating Learners to Excel at Extensive Reading." JALTCALL 2018, Nagoya, Japan.
- 2018/3 "Proven Results of an Ambitious Extensive Reading Programme."

- TESOL Greece 39th Annual International Conference. Athens, Greece.
- 2018/2 “Proven Results of an Ambitious Extensive Reading Programme.” 25th Jubilee International Conference of TESOL Northern Greece”. Thessaloniki, Greece.

## 論文

- Koby, C.J. (2018d). “Field Notes: Reports on two recently attended international conferences.” *TESOL Greece Journal*, December 2018, (140), in press.
- Koby, C. J. (2018c). “Special Education Needs in Language Education: An Expert View.” *TESOL Greece Journal*, September 2018, (139), 27–35.
- Koby, C. J. (2018b). “From Analog Consumer to Digital Creator.” *TESOL Greece Journal*, June 2018, (138), 27–36.
- Koby, C. J. (2018a). “JALT Praxis: An interview with Richard Day.” *The Language Teacher*, 42(1), 19–22.
- Koby, C. J., & Maclauchlan, K. (2018). “High performance ER in a Japanese university: Yes they can!” In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Language Teaching in a Global Age: Shaping the Classroom, Shaping the World*. Tokyo: JALT. 309–317.

## 教育活動

Throughout 2018 I worked to improve the *Reading Activity* program by introducing a self-access library management system both in the English Library and in the classrooms. In addition to adding barcodes to all of the nearly 2000 books in the program, I was able to add about 1000 new books to the collection. This new software has increased book turnover, making access to the books much better for all students while reducing loss to the department.

In August 2018, as part of the Overseas Study class, Mr. Masutomi and I escorted a group of 22 students to Victoria, Canada for 3 weeks of language school, excursions, and homestay. The aim of this study tour was to immerse students in Canadian culture and an English-speaking environment with the expectation that they will rapidly improve both communicative and linguistic skills. As an add-on to this trip, we spent the final 2 nights and 3 days in Vancouver and visited several local sights and attractions.

There were two events held this year that I was able to involve MGU students with as volunteer interns—JALT 2018 in Shizuoka, November 23–26; and

the Tohoku English Language Teaching Expo in Sendai, December 9. Our department was able to provide 23 students in Shizuoka and an additional eight in Sendai with immersive English experiences not typically found in Japan, and these experiences most certainly enriched the education and development of our students.

## 社会活動

On January 1, 2019 I became the National Business Manager for the Japan Association for Language Teaching (JALT), responsible for the relationships JALT has with some fifty members of the business community. This is an appointed position, directly responsible to the President of the association.

I am the Program Chair for the Fifth World Congress on Extensive Reading (2019) to be held in Taiwan. In addition, I am now the Program Chair for the Sendai Chapter of JALT after serving five years as the chapter president, as well as a newly elected Executive Board member of the Extensive Reading Foundation.

鈴木雅之

## 研究活動

東北 6 県と新潟県を含む 7 県に在住の 17 世紀-19 世紀イギリス文学・文化研究者の会—東北ロマン主義文学・文化研究会 (Tohoku Association for Romantic Studies, 略称 TARS)—の運営に携わっています。7 月には、「それぞれの地誌と眺望—Denham、Gray、Wordsworth そして Shelley が描いた風景」と題したシンポジウムを開催。12 月には研究発表 “The Pre-Romantic Sublime and the English Revolution: Poetry of the 1650s” と「ブレイクとスヴェーデンボリ」を聞き、TARS 機関誌『東北ロマン主義研究』第 5 号 (*Tohoku Romantic Studies* no. 5) を刊行 (2018.12.08)。7 月には Alan Bewell 教授 (Toronto) や Seamus Perry 教授 (Oxford) を招いての刺激的な国際学会 “Romantic Regeneration” (東京大学駒場) において研究発表・シンポジウム等の議論に参加。科研費研究課題「古事物愛好主義 (Antiquarianism) とイギリス・ロマン主義文学・文化」が今年度から新たに始まりました。

## 論文

1. 「月の魔力—ブレイクとスターン」『ローレンス・スターンの世界』開

文社、2018年5月。192-211頁。

2. 『『起源』の不在—ブレイクの《古代ブリトン人》を読む』『東北ロマン主義研究』第4号、2018年12月。35-50頁。

## 研究発表

「ブレイクとスヴェーデンボリー《靈的訓戒者》(*The spiritual Preceptor*, 1809)「解説」を読む」第13回東北ロマン主義文学・文化研究会。東北大学文学研究科、2018年12月8日。

## 社会活動

日本英文学会東北支部理事

日本ジョンソン協会論集第6号編集委員

東北ロマン主義文学・文化研究会 (TARS) 代表

## 科学研究費

古事物愛好主義 (Antiquarianism) とイギリス・ロマン主義文学・文化の研究 (基盤C、代表)

## 教育活動

「英米文学講読」では *A Flower Garden of English Poetry* (Eiko-sha, 2008) を使用テキストとして、英米詩を毎回数名の担当者を決め発表してもらいました。作品を声に出して読み、英語を文法的に正しく読み日本語訳を付すことを基礎作業としました。出席者は担当者の発表に対しては必ずコメントすることを義務としました。発表を聞いてコメントすることは2年生にとっては想像以上に難しく高いハードルですが、少しずつ良いコメントができるようになりました。「英文学史I, II」では、時代の流れ(政治・経済・宗教)と文学作品の相関関係に注意を払いながら、時折DVDによる文学作品の映画(『ロミオとジュリエット』、『ある晴れた日に』)を挟み、Chaucer から T. S. Eliot までを前期と後期とに分けて講義しました。前期・後期それぞれの期末試験の前に中間試験を入れることで、1回の試験範囲を短くしました。また *Romeo and Juliet* (1597) と *Gulliver's Travels* (1726) を読み日本語によるレポート(A4で3枚)を課しました。「英米文学・文化研究セミナー」では、5年目に入った Charlotte Smith, *Conversations Introducing Poetry* (1804)(プリント)を精読し読了しました。英語は大学院レベルの難しい作品なのでまずは文法的に正確に読む訓練をしました。

詩と科学（博物学 Natural History）というふたつの文化の衝突と融合がどのような表現を生むかを学生とともに考えました。他学科にむけた「教養講義 B（外国文学）」（前期）では、英文学の中核を占める（占めていた）詩に焦点を合わせ、その歴史的流れと多様性を分かり易く解説し英文学の特徴と魅力について講義しました。

## 吉村典子

### 研究活動

ヴィクトリアン・アート研究に加え、過年度よりイギリスの戦後美術研究を徐々に進めてきた。後者においては、リチャード・ハミルトンについての資料収集・分析を行い、本年度は特に関係者への聞き取り調査を中心に行った。本年は、学会等で成果の公表を開始した。今後は、戦後美術についての調査研究に重点をおき、次年度はさらなる成果公表に努めたい。

### 論文

吉村典子「リチャード・ハミルトン《いったい何が、今日の家庭をこんなにも違ったもの、こんなにも魅力的にしているのか》再考」『宮城学院女子大学学芸学部英文学会誌』第 47 号、2019 年 3 月

吉村典子「絵画と空間 —バーン＝ジョーンズの《黄金の階段》とグロヴナー・ギャラリーをめぐる」『人文社会科学論叢』第 28 号、宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所、2019 年 3 月

吉村典子「マジョリカ —イギリス、日本（宮城）、アフリカ（ザンジバル）」『近代仙台研究会報告集』、近代仙台研究会、2019 年 2 月

### 共著

建築資料研究社他編『和製マジョリカタイル —憧れの連鎖』LIXIL 出版、2018 年 12 月

### 学会口頭発表 / 招聘講演会

吉村典子「リチャード・ハミルトンとラックス—1974 年の日本滞在を中心に」美学会全国大会、関西大学、2018 年 10 月

吉村典子「ヴィクトリアン・アートの世界 —その革新とロマンス」宮城学院女子大学英文コース会、2018 年 11 月

吉村典子「作品と空間との関係性 ―モリスとバーン＝ジョーンズの平面作品」ウィリアム・モリス研究会 / 意匠学会デザイン史分科会、日本女子大学、2018 年 12 月

## 社会活動

意匠学会・国際交流委員

意匠学会『デザイン理論』投稿論文・査読

美学会『美学』投稿論文・査読

宮城学院女子大学附属人文社会研究所第 27 回公開講演会 (シンポジウム) 座長

宮城野高校・出張講義

常盤木高校・フューチャートーク

INAX ライブミュージアム「和製マジョリカ・タイル」展覧会企画実行・協力

## 教育活動

本誌巻末の「講義題目」の科目を担当した。これらの授業の中にはアクティヴ・ラーニングの要素を含み、本年度は本学科 Wiltshier 教授とともに、授業と関連付けた国内合宿を実施した (12 月: 1 年生 90 名参加)。また、2016 年度開始の新カリキュラムのねらいの一つ「科目間の連携」については、「基礎セミナー (3 年次開講)」と本年度開始の「Academic Writing & Presentation (3 年次開講)」との連携を試みた。後者担当の Anne Thomas 先生には、深い理解と多大なる協力を得て 1 年目を終えることができた。この場を借りて、謝意を表したい。今後も、Thomas 先生と意見交換および授業アンケートを参考にしながら、「科目間連携」の在り方と運営について検討を重ねていきたい。

田島優子

## 研究活動

近年は 19 世紀アメリカン・ルネサンスの作家、ナサニエル・ホーソーン作品における女性表象に着目して研究を進めている。また、昨年度より宮城学院女子大学人文社会科学研究所の共同研究グループにて、「ノスタルジー」研究を行っている。この成果として、翰林書房より共著の『ノ

スタルジーとは何か』が出版された。

## 論文

1. 田島優子, 「イーディス・ウォートンの『無垢の時代』に見るノスタルジー」『ノスタルジーとは何か』, 翰林書房, pp. 107-140, 2018 年 10 月.

## 研究発表

1. 田島優子, (書評会)「イーディス・ウォートンの『無垢の時代』に見るノスタルジー」宮城学院女子大学人文社会科学研究所第 2 回研究会, 於宮城学院女子大学, 2018 年 12 月.
2. 田島優子, 「ナサニエル・ホーソーン短編作品における女性像」日本アメリカ文学会東北支部 3 月例会, 於東北大学片平キャンパス片平さくらホール 2 階会議室, 2019 年 3 月.

## 社会活動

1. 日本ナサニエル・ホーソーン協会 役員
2. 日本アメリカ文学会東北支部 役員

## 教育活動

今年度の「英米文学・文化基礎セミナー」では、19～20 世紀の主要なアメリカ文学の作家 (Kate Chopin, F. Scott Fitzgerald, Truman Capote など) によって執筆された短編小説を取り上げた。精読を通してそれぞれの作品を深く味わうようにしたことに加え, 学生同士でグループ・ディスカッションによる作品の考察をしてもらい, テキストで述べられている内容を根拠として示しながら論理的に説明/発表してもらおうという取り組みも重点的に行った。後期は英文レポートの構成についての説明や添削に力を入れた。「英米文学の世界 (19～21 世紀)」では Ernest Hemingway の短編小説を精読した。授業の始めに毎回考察すべき論点を提示し, 授業の終わりにその問いに対する各自の考えをミニレポートにまとめて提出してもらおうようにした。さらに評価 (採点) をして次の授業で返却するとともに, 学生の中から出てきた重要な指摘や優れたコメントを紹介するようにした。学生が集中して授業に取り組むようになったことに加え, 根拠を示して論理的に文章を構成するという点に関して, 一年をかけて一定の成果が見られた。

## 2018 年度 英文学科講義題目

### 🦋 英文学科専任教員 🦋

#### 遊佐典昭

ことばと人間  
英語音声学  
生成文法 (2 年生)  
Academic Reading  
英語学基礎セミナー

#### 増富和浩

Grammar (1 年生)  
Grammar (2 年生)  
生成文法 (3 年生)  
英語学基礎セミナー

#### 鈴木雅之

英米文学講読 (詩・演劇)  
イギリス文学史  
英米文学・文化基礎セミナー  
英米文学・文化研究セミナー／  
英米文化・文学研究セミナー※

#### 吉村典子

イギリスの生活と文化  
Intensive Reading (2 年生)  
イギリス文化史  
Academic Reading  
英米文学・文化基礎セミナー

#### 田島優子

Intensive Reading (1 年生)

Intensive Reading (2 年生)  
英米文学の世界 (19-21 世紀) /  
英米文学研究 (19-20 世紀) ※  
英米文学・文化基礎セミナー

#### Cory Koby

Reading Activity (1 年生)  
Listening & Vocabulary (1 年生)  
Speaking (2 年生)  
Listening & Vocabulary (2 年生)  
Overseas Study Preparation  
Overseas Study  
Academic Writing & Presentation  
Discussion Seminar  
文化研究 (オーストラリア・カナダ)

#### John Wiltshier

Speaking (1 年生)  
Listening & Vocabulary (2 年生)  
イギリスの生活と文化  
英語教育 (TESOL) / 児童英語教育※  
英語学基礎セミナー

### 🦋 非常勤教員 🦋

#### 王 軒

外国語としての日本語

**岡田 毅**

語法研究  
コーパス言語学

**金子義明**

Grammar (2 年生)  
英語学研究セミナー／英語学セミナー※

**菅野幸子**

文化交流論

**木村春美**

英語学研究セミナー／英語学セミナー※

**木山幸子**

心理言語学  
日英語対照研究／日英語比較文法論※  
語用論

**久保田佳克**

Writing (1 年生)  
Intensive Reading (1 年生)

**熊谷優克**

英米文学・文化研究セミナー／  
英米文化・文学研究セミナー※

**小泉政利**

日英語対照研究／日英語比較文法論※

**越川芳明**

英米マスメディア論

**佐々木誠逸**

Writing (1 年生)  
Intensive Reading (2 年生)

**佐藤 恵**

英米文学講読 (小説・批評)

**島 越郎**

Grammar (1 年生)  
Grammar (2 年生)

**清水菜穂**

アメリカ文化史  
アメリカ文学史  
英米文学・文化研究セミナー／  
英米文化・文学研究セミナー※

**杉山 恵**

Writing (1 年生)

**鈴木美津子**

英米文学の世界 (15-18 世紀)／  
英米文学研究 (17-18 世紀)※  
Academic Reading  
英米文学・文化研究セミナー／  
英米文化・文学研究セミナー※

**高橋久子**

Intensive Reading (1 年生)  
Writing (2 年生)

**千種眞一**

英語の歴史

**那須川訓也**

英語学研究セミナー／英語学セミナー※  
社会言語学

**福地和則**

Grammar (1 年生)  
英語教材研究  
英語科教育法 (3 年生)

**藤田 博**

英米文学・文化研究セミナー／英米文化・文学研究セミナー※

**室 陽子**

英語教育 (TESOL)／児童英語教育※

**Robert Green**

アメリカの生活と文化  
Writing (2 年生)

**Barry Kavanagh**

Speaking (1 年生)  
Speaking (2 年生)

**Bruce Leigh**

Writing (1 年生)  
Writing (2 年生)  
Academic Writing & Presentation

**Kyle Maclauchlan**

Speaking (1 年生)  
Reading Activity (2 年生)  
Writing (2 年生)

**Jerry Miller**

Speaking (1 年生)  
Discussion Seminar

**Gerald Muirhead**

Listening & Vocabulary (2 年生)

**Alison Kate Nemoto**

Listening & Vocabulary (1 年生)  
Speaking (2 年生)

**Tomomi O'Flaherty**

Writing (1 年生)

**Anne Thomas**

Academic Writing & Presentation  
Current English

※新カリキュラム(2016 年度以降の入学生)／旧カリキュラム(2015 年度以前の入学生)では科目の名称が異なるが合同科目である。

## 2018 年度 英語英米文学専攻講義題目

✎ 英文学科専任教員 ✎

遊佐典昭

木口寛久

**John Wiltshier**

鈴木雅之

吉村典子

田島優子

✎ 非常勤教員 ✎

**Bruce Leigh**

大学院生の在籍がなく、今年度は開講されませんでした。

## 2018 年度 卒業論文題目

### ※ 遊佐ゼミ (英語学)

菅野 南 …… Verbs in the Dative Alternation

菊田 詩織 …… Transfer of Markedness in Second Language Acquisition

阿部 優香 …… Critical Discourse Analysis of Japanese Education

横山 歩実 …… Unaccusative Traps in Second Language Learners

### ※ 増富ゼミ (英語学)

後藤麻柚子 …… A Meaning Extension Analysis of *Make*: From the Cognitive  
Linguistic Categorization

### ※ Wiltshier ゼミ (英語学)

佐藤 唯 …… Discourse Analysis of Student Teacher Classroom Interaction

## 英文学会活動報告

### 2018 年

- 4 月 13 日 「はじめての TOEIC」 (1 年生対象) 丸山豊氏
- 6 月 20 日 「日本人英語学習者による主語繰上げ文の習得」  
中山峰治氏
- 7 月 5 日 声と話し方講座 (前期) 1 年生コース  
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」 赤間裕子氏
- 7 月 18 日 英文学科 OG による就職講演会① ～航空業界編～  
藤原愛理氏
- 10 月 19 日 英文学科 OG による就職講演会② ～教育業界編～  
鈴木祥子氏
- 10 月 22 日 日本語パートナーシップ報告会  
阿部葉月さん (英文学科 4 年生)
- 11 月 29 日 「グローバル社会で活躍するために求められる意識と行動  
とは」 横山匡氏
- 12 月 12 日、19 日、1 月 9 日  
声と話し方講座 (2・3・4 年生対象)  
「面接対策・話し方実践コース」 赤間裕子氏
- 12 月 14 日、21 日  
声と話し方講座 (後期) 1 年生コース  
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」 赤間裕子氏

### 2019 年

- 1 月 16 日 TOEFL 講座 鈴木真太郎氏
- 1 月 17 日 英文学科 OG による就職講演会③ ～金融業界編～  
本郷佳菜氏



---

# English Certification

## —私の勉強法—

---



## TOEIC 学習法

2年 松田亜利紗

TOEIC スコア：855

4月の学内 TOEIC を受験する際、「クラス分けのために実力を測ることができれば……」と、昨年と同様に全く勉強をしませんでした。しかし、前回よりも約 100 点スコアが上がっていました。前回と同様、特に対策はしておらず、前回から約半年後の受験だったため、前回紹介した普段からしていることにも何も変化はありませんでしたが、自分なりにスコアが上がった理由について改めて考えてみました。その結果、理由と思われることを 2 つ見つけました。

1 つ目は、多読です。多読の授業を通して、授業中はもちろん授業外でも様々な英語の本に触れる機会があります。読む本は、ジャンル・語数・語彙のレベルによって幅が広く、自分に合った本を選んで読むことができます。また、楽しんで本を読んでいるうちに、自然と新しい単語が身についていきます。これは前回紹介した、「自分が興味のある英語の本を読む習慣」と同じことで、自分に興味がある本を読むことで、楽しみながら英語に触れることができ、結果として語彙力が上がるのです。

2 つ目は、課題にきちんと取り組むことです。私は、自主勉強をすることがあまりないため、大学の課題だけは真摯に取り組むように心がけています。これは当たり前のことのように思われますが、課題をやっつけて「やる」のと、「取り組む」のは全く違います。ただやるだけでは何も身につかず、時間の無駄です。課題にしっかり取り組むことは、授業の復習にもなり、学習した内容が身に付きます。

これらのことが私の英語の能力を高め、結果として TOEIC のスコアの上昇に繋がったのだと思います。皆さんにとっては当たり前のことで、「何

の参考にもならないじゃないか」と思う方もいるかもしれませんが、その「当たり前のこと」に手を抜かずに取り組むことが大切なのだと思います。

## わたしの TOEIC 学習法

4年 大竹 美穂

TOEIC スコア：825

私は今まで TOEIC の問題集どころか、机に向かって英語の勉強もまともにしてこなかったのですが、ここまでスコアが伸び、正直自分でも驚いています。ですが、スコアがここまで伸びた理由としては、YouTube で海外の動画をよく観たり、バスや電車に乗っているときに洋楽を聴いたり、暇なときに洋画や海外ドラマを観たりしていることが挙げられます。この勉強方法では、リスニングしか伸びないと思っていましたが、実際にリーディングのスコアも上がってきているので、特に問題はないと自分では思っています。しかしもちろん、たまには英語の本などを読むのも良いと思います。例えば私のおすすめはスティーブン・キングの書いた小説（英語版）です。スティーブン・キングの書いた本の多くはすでに映画化され、DVDなどで観ることができます。ですので、1度その映画版を観てから、そのあとに英語の小説を読めば、内容はほとんど同じなので、比較的楽に読むことができると思います。それ以外でも小説（英語の）が原作の洋画なら何でも自分の好きなものでいいと思います。私のように机に向かって勉強をしたり、問題集を解いたりするのが苦手な人は、無理して苦手な方法で勉強を続けるよりは、自分の一番好きなやり方で勉強したほうが成績も伸びるし、続けられると私は思います。あと TOEIC のテスト自体ですが、1年に1回英文学科全体で受ける IP テストだけでなく、外部で開催される公開テストも積極的に受けに行ったほうが良いと思います。私は最近ま

で時間が間に合わず、マークシートの最終2行分の問題を解き終えることができず、その分スコアを無駄にしていたのですが、外部の公開テストを複数回受け、段々と時間配分が無意識のうちにわかってきたので、最近では、最後のマークシート1行分以外は終わらせられるようになりました。確かにTOEICの受験料は1回約5000円と決して安いものではありませんが、本当にスコアを伸ばしたいのであれば、受けて絶対に損はありません。

## 英文学科なのに TOEIC 265 だった大学生が スコアを 545 上げて英語教員になる話

4年 後藤麻柚子

TOEIC スコア：810

私は大学入学時、「卒業するまでに TOEIC860」を目標にしました。英語教員を目指しており、高い英語力が必要だったからです。しかし私にとって TOEIC860 は簡単に取得できるスコアではありませんでした。初めて受験した学内 TOEIC は 350 点です。そして大学2年生の夏に取った点数は 265 点。TOEIC の勉強をほとんどしなかったことや長い試験時間と大量の問題に耐えられず集中が続かなかったことが、この低い点数の原因です。「265」というスコアを見たとき、私は「英文科なのにこんな点数を取ってしまって恥ずかしい」と思いました。そして心を入れ替えて勉強しました。

まず初めにしたことは、「自分の苦手を知ること」です。スコアが低すぎたため、すべて苦手なのではないかと思いましたが、Part ごとに何ができていないのかを分析しました。私は Part5 がとても苦手で正答率が低かったため、文法のテキストを毎日解くようにしました。苦手を見つけてできるようにし、それを繰り返すことで徐々に TOEIC の点数が伸びました。

次に大切なのは「試験時間に慣れること」です。TOEIC は約2時間の

試験ですが、私は集中を保つことができませんでした。問題数が多く途中で嫌になってしまい、Listening の問題を聞き逃すことがよくありました。そこで、TOEIC の1週間前から毎日試験時間と同じ時間に TOEIC を解くようにしました。そうすると、2時間集中することに慣れ、どのくらいのスピードで読み進めれば時間内に解き終わるのかを知ることができます。その結果、時間が足りず「塗り絵をする」問題数が減り、時間内に全問解き終わるようになりました。

また「自分に合ったテキストを使うこと」も重要なことだと思います。TOEIC のテキストはたくさん種類があり、いざ購入しようとするとき迷ってしまいます。そういったときは、自分の目標に沿って選ぶことがおすすめです。私は 265 点を取ってしまった後、目標点数別に分かれているテキスト（当時は 470 点）を使っていました。そして 470 点を越えたあとは、Part ごとに分かれているテキストを使って苦手な Part5 を強化しました。

TOEIC に限らず英語を習得するには、「継続」が大切です。継続するコツは、「TOEIC の申し込みを毎月する」ことです。受験料は学生にとっては高いですが、毎月受験することでモチベーションを維持することができます。もしも就職活動や教員採用試験に TOEIC が必要なら、締め切り直前の数カ月に連続で受験することがおすすめです。私は教員採用試験の加点制度に TOEIC730 点が必要だったため、3 カ月連続で受験し 100 点上がりました。

私が TOEIC810 を取得したのは、大学4年生の11月です。最低点の 265 点を取ってから約2年4カ月で 545 点上がりました。しかし目標にしている 860 点は達成できていません。卒業後、英語教員として教える立場になりますが、さらなる英語力の向上を目指して 860 点とは言わず、990 点を目標に学び続けていきたいと思っています。

## 私の TOEIC 学習法

3年 佐々木 華

TOEIC スコア : 750

年に1度、必ず TOEIC を受験していて、今回が3度目の受験。今のところ、少しずつですが、着実にスコアを伸ばすことができています。TOEIC のスコアを伸ばすにあたって、各パートごとの対策は必要だと思います。また、試験の中には普段なかなか目にすることがないような単語もたくさん出てくるので、そういった単語の学習も必要です。私も試験前には公式の問題集に取り組んだり、自分の苦手なパートの過去問を解いたりしています。しかしそれ以上に、大学の授業の予習復習などをはじめとする、普段の取り組みが重要であると感じています。そこで今回は私の普段の学習方法について書きたいと思います。

まず、私は普段の授業の予習復習を大事にしています。英文を読む際、以前はすぐに分からない単語の意味をすぐに調べてしまっていたのですが、最近は前後の文脈や、単語の品詞を見極めて、推測してから辞書を引くようにしています。TOEIC の問題の中で、分からない単語が出てきた時も、この推測力が役に立ちます。何も考えず、ただ作業のように辞書を引いて単語の意味を確認するよりも、推測してから辞書を引いて覚えたほうが理解が深まります。また Reading だけでなく、Listening の問題でもこの推測力が役に立ちます。試験では、一度しか音声流れないため集中力が必要になりますが、聞き取れた単語から会話の流れや中身を推測することで、問題が解けるようになります。

予習復習以外にも、普段からできるだけ英語に触れるようにしています。毎日継続して勉強するためには、英語を楽しみながら学習することが大切だと思います。私は映画を観ることが好きなので、洋画の中に出てくる会

話などを使って英語を学習しています。洋画は、最初に英語の字幕で一通り観てから、次に日本語の字幕で観て内容を確認しています。その時に分からなかった単語などがあつたら、ただ単語だけをメモするのではなく、会話の中で、その単語がどのように使われていたかも一緒にメモします。映画の会話はカジュアルな英語が多いので、その単語が他にどのような文脈で使われるのかを辞書を使って調べ、一緒にメモしておきます。そうすることで理解も深まるし、自分が英文を書く時の引き出しが増えます。他には洋楽や YouTube の動画などを使って、同じように英語を学習しています。洋楽や短い動画は、通学中でも簡単に取り入れることができるので、よく利用しています。

TOEIC のスコアを上げる為に英語に取り組むよりも、自分なりの学習方法を見つけて、毎日継続して英語の勉強をすることが大切だと思います。これから 800 点以上を目指すにあたって、今までの学習方法を継続しつつ、更に自分の苦手な分野である Reading の問題にも対応できるような学習方法を見つけていきたいです。

## 730 点に向けた学習法

4 年 伊藤 美聖

TOEIC スコア：720

お恥ずかしいお話ですが、私は 3 年生に上がるまでは TOEIC200 点台でした。3 年生になり進路について真剣に考え始め、このままではいけないという焦りから勉強を始めました。私の場合、教員採用試験受験の勉強を踏まえながら 730 点を目標に設定しました。残念ながらまだ目標は達成していませんが、目標設定をすることが点数を上げる 1 つの方法だと感じました。今は、インターネットを通して情報収集をしたり、友人から助言

をもらったりし、それを実行しています。他人からのアイデアではありませんが、自分が実際に心がけ、効果を感じたことについて2つ述べていきたいと思います。

はじめに、単語勉強を毎日継続することを心掛けました。知らない単語があると読み進めていくことが困難に感じ、やる気の低下につながります。それを感じていた私は、音声を聞きながら単語本に目を通してながら毎朝通学しました。一冊を一通り行うのではなく、100語ずつ覚えるまで何度も繰り返し読みました。時間があるときは、実際に発音してみるなど、少しでも早く覚えられるよう工夫しました。そのおかげで、次のテストでは200点以上点数を上げることができました。

試験日が近づくと、公式問題集などから3つの問題を選び、それぞれ本番同様2時間通しで3回ずつ取り組みました。これは、友人から教えてもらった方法です。単語量が増えても、時間内に問題が解き終わらないことが欠点だと感じていました。そこで、集中力をあげるために、また、TOEICの問題傾向を把握することに取り組みました。初めはやはり時間内に解けませんでしたが、何度も解くことで問題の内容や流れが分かり、時間内に解き終わることができました。本番の試験でも、単語や内容が類似しているものが多かったため、流れをうまくつかむことができ、全問解くことができました。

最近の問題集を終えた後、丸付けだけで終わるのではなく、知らない単語や文法表現をノートに書きだし、それらを何度も繰り返し書いて練習しています。私は書いて覚えることが得意で、また、せっかく取り組んだ問題集を解答だけで終わらせるのは勿体ないと感じたのでやり始めました。かなり時間がかかり効率が悪い方法ですが、個人的に成果を感じているので、時間があればゆっくり取り組むことで新しい発見などもあるかもしれません。

いろいろな学習法があり、得手不得手もあると思います。私は、TOEIC

の勉強を通して、1つの方法にこだわることなく積極的に他人の意見を取り入れ挑戦してみることも、自分にあった学習法を見つけるために必要だと感じました。今後も目標を達成出来るよういろいろ挑戦していきたいです。

## English Certification A・B・C

「English Certification A・B・C」は TOEIC 等のスコアや英語関係の検定試験合格等により単位を認定する制度です。

2015 年度以前の入学者は TOEIC のみが単位認定の対象でしたが、2016 年度以降の入学者より下記の英語検定が単位認定の対象となります。

	TOEIC	英検	TOEFL paper	TOEFL iBT	IELTS
English Certification A	600 以上 720 未満	2A 級	500 以上 550 未満	65 以上 79 未満	5.5 以上 6.5 未満
English Certification B	720 以上 830 未満	準 1 級	550 以上 600 未満	79 以上 96 未満	6.5 以上 7.5 未満
English Certification C	830 以上	1 級	600 以上	96 以上	7.5 以上

TOEIC600 点以上を取得し、単位を申請した人は他に次の方々があります。

2015 年度以前の入学者で TOEIC 600 点以上～730 点未満で単位申請をした人：

加藤冬美香（4 年）、佐藤夏帆（4 年）、千葉彩加（4 年）、今野亜美（3 年）、  
松下未来（3 年）

English Certification A で単位を申請した人は他に次の方々があります。

2016 年度以降の入学者で English Certification A で単位申請をした人：

甲能万結（1 年）、佐藤千紘（1 年）、佐藤美美（2 年）、堀真奈衣（2 年）、  
石川舞（3 年）、内海幸奈（3 年）

## お詫びと訂正

『英文学会誌』第45号（2017年3月）、17頁に掲載した「3. 留学生の推移」の表に誤りがありましたので、下記の通り訂正してお詫び申し上げます。

訂正箇所：「英語圏以外」の派遣先の「忠南大学」の所在

誤：中国 ⇒ 正：韓国



# 編集後記

『英文学会誌』

第47号をお届けします。原稿をお寄せ下さった方々に心より御礼申し上げます。特別寄稿を頂いた山本百合子氏は本英文学科の卒業生です。地球環境という人類の未来を左右する大問題解決のために世界中を飛び回って活躍されています。本号には長年にわたって英文学科を支えてこられたおふた方へのメッセージを掲載しました。故両角千江子先生は非常勤時代も含めて43年間アメリカ文学を講じてこられ、文学テキストの精読という英文学科の基本姿勢を貫かれました。亡くなる直前までの見事な生き方を側聞するにつけ「棺を蓋って事定まる」という言葉を思い出します。36年間英文学科の屋台骨であった阿部ひとみさんも本年をもって退職です。この数年は本誌の編集をご一緒しましたがそのお仕事振りは確実そのものです。退職後はバード・ウォッチングの生活がお待ちのようです。本号も阿部さんと小室利沙さんには格別お世話になりました。真空常寂。

編集委員 鈴木雅之

## 執筆者紹介

吉村典子 宮城学院女子大学教授  
John Wiltshier 宮城学院女子大学教授  
遊佐典昭 宮城学院女子大学教授  
阿部ひとみ 宮城学院女子大学副手  
山本百合子 イオン環境財団事務局長

## 編集委員

John Wiltshier  
鈴木雅之  
阿部ひとみ  
小室利沙（編集補助）

## 英文学会誌 第47号

発行	2019年3月10日
編集	代表 John Wiltshier
発行所	宮城学院女子大学 学芸学部英文学会 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号 電話 (022) 279-1311(代)
印刷所	プリントコープKOPAS 電話 (022) 727-1760